【小説】ディスタンス

星野廉

目次

第 1 話　残された携帯電話
＊ 3

第 2 話　オレンジ色の記憶
＊ 9

第 3 話　染まる
＊ 15

第 4 話　つながり
＊ 25

第 5 話　大丈夫
＊ 33

第 6 話　変わる
＊ 41

第 7 話　視線
＊ 49

第 8 話　踏み出す
＊ 57

第 9 話　出発点
＊ 67

第 10 話　隔たり
＊ 77

第 11 話　符合
＊ 87

第 12 話　離れる
＊ 97

第１話　残された携帯電話

＊

　その日の朝早くわたしは新幹線を利用し、名古屋から東京に着いた。東京駅から電車を乗り継ぎ、午前中に世田谷区にあるＳ警察署に寄った。事故捜査の参考資料として警察が弟の部屋から持ち出していた数点の物品を、両親の代理として受け取るためだ。
　担当だった斜視気味の刑事の前で、一点一点書類と照らし合わせて確認する作業がもどかしかった。紙袋に詰めた弟の持ち物を骨箱のように両手で抱えて、わたしは電車で東中野にある弟の部屋に向かった。
　前日に名古屋の実家から連絡しておいた引っ越し業者による見積もりが午後早くに済み、引っ越しは翌日に決まった。
「まず貴重品を別にして、ご自分でお持ちください。衣類やこまごまとした物の荷造りだけをしておいていただければ、あとは全部こちらで運びます」
　見積もりに来た男は言い、引っ越しの手引きの冊子を残して去った。

　携帯電話を使い、引っ越しの期日と荷物の運搬の詳細について実家の母に知らせ、警察署での手続きが完了したことも伝えた。
　用意しておいた言葉は、最後になって一気に早口でまくし立てた。
「わたし、しばらく東京にいる。光太のことを忘れるためにも、しばらく美術館や展覧会を回って絵でも見ていたいの。大学のほうは心配いらない。学園祭が近いから、みんなろくに授業に出ていないし」
　不意をつかれた形の母は、予想通りわめき出した。
「そんなのずるいわ。お父さんもあなたも、いつもそうやって私を見放すのね」
「こっちでは、岸川さんの所に泊まらせてもらうから、大丈夫」
「あなたは大丈夫でしょうけど」と母は声を詰まらせた。「香織、お願い。私を一人にしないで。置いてきぼりは、いや」
　泣き脅しが始まりそうな気配になってきた。光太の死以来、母は情緒が不安定になり、子ども返りのような精神状態になっている。母は、わたしを頼る標的として選んでいる。それがうっとうしくてたまらない。
「またそんな子どもみたいなことを言っている。あの人と違って、わたしはやるべきことはちゃんとやったでしょ？　　少し休ませてほしいの」
　わたしは、母と別居中の父を「あの人」と呼んでいる。
「そんなのいや。だめよ。ねえ、お願いだから」
「寂しかったら、光枝おばさんの所に行けばいいじゃない。別に、わたし、もう帰って来ない訳じゃないんだから」

　そう口にしたあと、言い方がまずかったことに気づく。
「当たり前です。もうこれ以上、家族が減るのはいや」
　案の定、弟の死を思い出させる結果になってしまった。
「学園祭が終わるまでだから、すぐに帰るって」
「だめ」
「熱帯魚に餌をやるのを忘れないでね。光太の形見よ」
　意地の悪い言い方だと思いつつ、わざと弟の名を出す。
「死んでも知らないからね。いいえ、あんなの殺してやる」
　今の母の精神状態ならやりかねないと思う。
「わたしが帰ったとき、一匹でも死んでいたら、お母さんの猫たち、皆殺しにするわよ」
　母の心の状態がこちらに伝染してくる。
「まあ、ひどい」
「餌は三日に一度よ。耳かき三杯。聞いてる？」
「もう、勝手にしなさい」
「本当？　　じゃあ、勝手にさせてもらう。電話だけは毎日必ず掛けるからね。言っておくけど、そっちからの呼び出しには出ないわよ」
　母とのやりとりは、こうして終わった。その後すぐに、母の姉である光枝おばさんにも電話し、切り口上で一方的に留守中の母のことを頼んだ。わたしはこの伯母も苦手だ。母の実家の女性たちは、みんな金銭的に細かく、しかも意地が悪い。

　わたしは弟の衣類や日用品の荷造りに取り掛かった。弟の財布は手元にあるが、貯金通帳やほかの貴重品については、どこに何があるのかが分からない。引っ越し業者を信頼するほかない。
　業者が置いていった段ボール箱に衣類を詰めている途中、クローゼットの中に洗濯がされていない衣類がかたまっているのを見つけた。死の直前まで弟が身に着けていたのだと思うと、いとおしくてならない。一枚一枚丁寧に畳んで箱に収めていった。
　洗濯してあるものとは違う。一度素肌に触れたり、体温や汗を通した衣類は、手にしっとりとなじんできて、わたしは無意識のうちにその感触と匂いのとりこになっていた。
　長い間穿いていたと思われるひときわ柔らかい感触のジーンズを手にしたときには、思い切り鼻を押し当てずにはいられなかった。長く置きっ放しにしたコーラのような、酸っぱく哀しい匂いがした。

　警察から返された物の中に、携帯電話と充電器があった。充電がフルになっている。事故の捜査をするに当たっても、利用されたことがうかがわれる。
　Ｓ署から名古屋の家に最初の電話があったときには、取り乱している母に代わってわたしが応対した。自動車事故とほかの可能性の両面で捜査をしていると言われた。
　弟の携帯電話のデータを見ることには抵抗がある一方で、好奇心もあった。仮に弟が日記を残していたとすれば、わたしは焼却するかシュレッダーで処分するだろうと思う。

日記らしきものは今のところ見当たらない。

戻ってきた物の中に、ブルーの表紙のアドレス帳があった。めくってみると、氏名、住所、電話番号が明記されたものは少なく、そのほとんどが名古屋市内か愛知県内の住所だった。中学と高校時代の友人のものに違いない。

都内とその近辺の住所が記されたものもある。男性のフルネームと電話番号が記されたものばかりだ。さらにカタカナやひらがなで書かれた名字だけや、名字なしの男の名や、ヒロ、マーちゃんといったあだ名らしい性別不明の名に添えられた携帯電話の番号がたくさん書かれていた。

万が一携帯電話をなくしたさいに備えてのメモと考えられないこともない。弟には割と慎重な面があった。いずれにせよ、不透明な印象のするアドレス帳だった。その違和感はどこから来るのだろうと考えているうちに、ふと気付いた。女気がない。

あのような事故に巻き込まれた弟は、この東京でいったいどんな生活をしていたのだろう。わたしは新幹線で東京に向かう間にも、そのことばかりを考えていた。

アドレス帳をめくっていて、そうした疑問を晴らす鍵の一部に触れたような気がした。アドレス帳にざっと目を通した後は抵抗感がなくなり、弟の残した携帯電話のデータを見ることに対するやましさは消えていた。

携帯電話の電源を入れる。Ｓ署で受け取ったときには、電源は切られていた。メールはない。警察が削除したのか、そもそも弟がメールをあまり使っていなかったのか、読んだメールをこまめに削除していたのか。「電話帳検索」を出し、登録された名前と番号をざっと見ていった。女気がない。アドレス帳と同じ印象を受けた。明らかに女性と分かる名が極端に少ない。

島田香織。わたしの携帯電話の番号はフルネームで登録されていた。名字が添えてあるのがよそよそしくもあり、わびしい。

年子だったため、上京するまでの弟についての記憶は、自分の過去とほぼ重なる感じがする。毎日同じような生活を続けてきたという思いがある。姉弟としては他人から不思議がられるほど仲が良かった。実際、互いに隠すことはあまりなかったような気がする。わたしの初潮、弟の初めての精通についてさえ、互いに知っている。そこまで話す仲だった。

女気がないというのは、距離を置いて暮らすようになったために感じた印象だと思う。よく考えると意外なことではない。むしろ納得できる。そういう子だった。

弟はあまり強い自己主張をする性格ではなかったが、大学進学については希望を曲げなかった。どうしても東京の大学に入ると言い張って、息子を遠くに離したくなかった母を困らせた。せっかく推薦を受けて合格した地元の大学へは進まなかった。わたしから見ても高望みだと思われる都内のミッション系の大学を第一志望にして譲らなかった。

なぜその大学にこだわるのかと、わたしは尋ねた。

「だって、格好いいんだもん」

あきれるような理由が返ってきた。

「浪人してまで行くわけ？」

　さらに追究した。
「名前に『院』がつく格好いい大学なら、どこでもいい」
　それなら、ここはどうかといって「学院」が最後につく名を挙げてみた。
「格好いいじゃん。そこって、東京にあるの？」
「そうよ。でも、女子短大なんだけど」
「入れてくれるんだったら、そこでも別に構わない」
「本気？」
「とにかく東京に行きたいんだ」
　わたしには、答えにならない答えとしか思えなかった。でも、そうした会話には慣れているため、説教じみた意見を述べることなく聞き流した。
「予備校生もやってみたいし、来年駄目だったら、専門学校でもいいし」
　いかにも弟らしい言葉だった。これも聞き流した。
　アドレス帳にも携帯電話のデータにも、女気がない。家族の干渉から逃れた弟が求めていたものは、そうした状況だったに違いない。姉であるわたしは確信に近いものを覚えた。
　どういう経緯で弟が、ある男性と知り合い、その人の車の助手席に乗っていて事故死したのかは分からない。でも、その男性と一緒にいたことだけは、すんなりと理解できる気がした。
　携帯電話の電源を入れたことで、これまで封印されていた箱の蓋を開けたような心境になった。何が出てくるのかは分からない。何も出てこないのかもしれない。弟の携帯電話と手帳をデスクの上に置き、わたしは荷造りの作業に戻った。

第 2 話　オレンジ色の記憶

＊

子どもたちの声が近づいてきた。さっきまではひとかたまりのざわめきだったのが、一人ひとりの声として聞こえる。何を言っているのかまでは、よく聞きとれない。

わたしは死んだ弟の部屋にいた。

半年振りで会った父を含めた近親者だけの葬儀が名古屋で終わり、わたしは弟の住んでいた部屋を引き払いに上京した。母も一緒に行くと言ったが、わたしは断固として一人で行くと主張した。

弟の死以来、人と会うのが疎ましい。刷り込みされたひな鳥のようにべったりとわたしに付きまとう母はもちろん、親しい人と顔を合わせたり口を利くのが特に嫌でたまらない。初対面の人と会ったり話すほうが、まだ気が楽だった。

わたしはスタンドミラーの中の自分を見つめていた。裾を二センチくらい折りはしたが、弟のジーンズは驚くほどわたしの体にぴったりと合った。中に着けているトランクスの慣れない感触が残るが、不快ではない。それどころか、下腹部を不意打ちした違和感があまりにも快く、しばしうっとりと目をつむっていたほどだった。

胸だけが目立つ。他の女性と比べて小さいと気にしている乳房が、男物のぴったりとしたＴシャツにくっきりと浮き出ている。

急に笑い声が間近に聞こえて、わたしは身をすくめた。窓のすぐ下の道路に子どもたちが立ち止まって何かに熱中しているらしい。窓に寄り、カーテンを引いた窓のサッシが閉まっているのを確かめ、再び鏡の前に立った。

肩まである髪をかき上げ後ろで束ねてみると、丸みに欠けた輪郭の顔が鏡に現れる。男みたいな顔だといつも思う。唇が薄くほお骨が張っているため、一重まぶたの目が余計に意地悪そうに見える。

きつい顔立ちをやわらげようと考え、髪型には特に気を使い、これまでいろいろ試してみた。結局、長めにしてふんわりとした曲線にまとまる今のスタイルに落ち着き、一年以上同じ髪型を通している。

ぱたぱたと耳を打つ音と共に後ろに束ねていた髪が両肩に落ちてきた。Ｔシャツの右肩に染みがあるのに気が付いた。五円玉の穴ほどの小さな薄い黄色の染みが肩の縫い目をまたいで付いている。弟の生活の名残だと思うと、傍らに弟が無言で立っているような気がした。

弟の光太とは似ているとよく言われた。年は一つしか違わなかった。幼いころの写真で気に入った一枚がある。その写真では、二人ともおかっぱ頭でおそろいの服を着せら

れ、性別不明の双子のように見える。成長するにつれて二人の容貌に違いは出て来たものの、見る人にはよく似た印象を与えたようだ。どちらかと言えば、わたしは小作りな目鼻立ちに痩せて骨ばった体つき、弟は体が華奢なわりには顔は下ぶくれで大きな造作の容貌になった。

『光太は女にしても美人だけど、香織は光太の出来損ないみたいね』

かつて、口の悪い親戚の女が幼いわたしたち姉弟を前にして言ったことを覚えている。

光太には右目の下にホクロがある。あったと言うべきなのか。米粒の半分くらいの大きさで、本人は気にしていたが、わたしは気に入っていた。

不意に窓の外から男の子のものらしい低めの声がした。つぶやくように何か喋っている。わたしは聞き耳を立てた。

「……本当だよ。ここから見えたんだ」

前のほうは聞き取れなかったが、澄ました耳にそんな言葉の切れ端が飛び込んで来た。さらに同じ声の主がささやき、それに応えてほかの声の笑いが起きた。笑い方から、淫らな内容の話らしいと感じる。

立ち聞きしている自分の行為が、はっきりと窓に映っているような気がして焦りを覚える。窓を閉じた二階の部屋からは子どもたちの話の詳しい内容までは分からない。そっと窓を細めに開けて、上からのぞき見してみたい誘惑に駆られる。

外はまだ明るい。蔓と葉と花のパターンを織り込んだ緑のカーテンの薄い柄の部分に、オレンジ色の西日が透けて見える。

再び笑いが起こった。声の響きから、男子児童ばかりのように思える。ますます外が気になる。記憶では、窓の外には大型の普通車が一台通れるほどの幅の道が伸び、このアパートと道路はブロック塀でさえぎられているはずだ。

笑いの後に沈黙が続いている。子どもたちが立ち去る足音が聞こえてこない。小学五、六年生くらいの男の子たちが、西日に照らされた塀に映る自分たちの影に向かってくすくす笑いながら並んで放尿している。そんな光景が頭に浮かぶ。

小学一年生のときだった――。

わたしは、光太を含む四、五人の男の子たちと川原にいた。川の流れの緩やかな部分を石で囲って一時的な池を作り、その中に迷い込んでくる魚を閉じ込めて遊んでいた。

突然、リーダー格の英二という三年生が川に向かって放尿し始めた。それに習って、男の子たちが次々とズボンを下ろしたりジッパーを外した。並んだ男の子たちは性器を見せ合いながら、くすくす笑った。わたしと光太だけがその様子を後ろから眺めていた。

当時、光太はしゃがんでおしっこをしていた。ほかの男の子たちのように立ってできないこともなかったが、緊張して時間がかかったり、ズボンの下のほうをしばしば濡らして満足にはできなかった。かがんで放尿する癖は、姉のわたしやほかの女の子たちばかりと遊んでいたことから身に付いたのかもしれない。注意する年長の者もいたが、光太はしゃがんでするほうが落ち着くらしく、一向にその習慣を変えようとはしなかった。

　先に用を足した英二がジッパーを上げながら、わたしたちのほうを向いた。
「光太、おまえもこっちへ来て小便をしろよ」
　英二が弟を呼んだ。隣に目をやると、弟は眉間にしわを寄せて口をとがらせ、泣き出しそうにも見えるほど真剣な顔をしている。以前だったら、こんなときの弟は頼りなげな表情で助けを求めるまなざしをわたしに向けたものだった。
　弟はわたしを見ないで、男の子たちのほうをまっすぐ見ている。わたしは弟の迷いが消えていくのをとっさに理解した。きっと弟は英二たちのほうへ行くだろうと確信した。放心したように弟の細い体がすっと前に伸びた。
　弟が男の子たちの所へ走って行くのを見たくなかったので、わたしは体を回して川と逆の方向に歩き始めた。本当は駆け出したかったが、わざと普通に歩いた。目の前の物が目に入らず、頭に血が上るのを感じた。
　悔しかった。きーんと耳鳴りがしてきて、背後の男の子たちの声と川の流れの音がはるか遠へと去って行くような気がした。硬い石ころばかりの所から柔らかい草地に足を踏み入れたとき、わたしはようやく振り返ることができた。
　石を並べた囲いの隅に大きな魚でも追い込んだのか、男の子たちが頭を寄せ合っているのが黒いかたまりとなって見えた。その向こうに夕日を受けた川面がオレンジ色に輝いていた。

　あのときも、ちょうどこれくらいの時刻だった。目の前には、記憶の中の色と同じオレンジの光があった。

第３話　染まる

＊

弟の遺品である携帯電話に誰かが掛けてくる可能性は高いはずだ。光太の死を知らない友人や知り合いがいて、通話してきたりメールを送ってくるというのが自然な考え方だろう。

家族の一員が亡くなる。故人の携帯電話に登録されたデータや、パソコン内に保存されたままのメールやファイルが残る。家族に内緒で開設していたブログがあってもおかしくはない。そうしたデータはどんな運命をたどるのか。

これまでテレビのニュースや新聞で読む記事の中に、こうした状況に至るケースは数知れずあったはずなのに、全然考えたことはなかった。

わたしだって、そうなのだ。いつ不慮の死を遂げるか分からない。その結果、デジタル化された個人情報やデータが無防備な形で残る。かなりの高齢者や幼い子どもを除き、そうしたリスクを抱えていない人のほうが珍しいだろう。携帯電話のほかに、わたしは実家にパソコンを持っている。限られた機能しか使えないものの、母でさえ携帯電話を持っている。

遺品という言葉にネット空間がからんでくることに、違和感を覚えるのはなぜだろう。そこまで考えないのが普通なのかもしれない。でも、それは変だ。既に現実なのに、ちぐはぐに感じられることは考えない。それこそ、ちぐはぐではないか。

わたしは荷造りに見切りをつけ、あとは業者に任せようと決めた。たとえ「お任せパック」とかいう引っ越しであっても、最小限の荷造りを一人でやるにも限度がある。弟といっても、結局は他人だ。しかも、もう口を利くことができない相手だ。どこに何があるのかをチェックするだけで、うんざりしてくる。

名古屋の実家にある弟の部屋なら、勝手は分からないわけではない。アパート探しには母も同行したが、わたしがこの部屋に入ったのは今回が初めてだ。光太のプライバシーに関する部分の片付けだけは出来る限りしておこう。そんな当初の決意が揺らいでくる。

疲れを感じたので部屋にあったクッキーの箱の封を切り、三個食べた後に心療内科で処方された薬を飲んだ。床に座り込み、上体だけをベッドに預けて、午前に訪ねた世田谷警察署の斜視気味の刑事とのやり取りを思い出す。

初対面のわたしにお決まりの悔やみの言葉を述べたあと、刑事は事故の直後に取り乱していた母の現在の様子を尋ねてきた。

「何だか人が変わったようになりました。いずれにせよ、上京は無理だと考えて、わたしが代わりに参りました」

「そうでしょうな。前途有望な息子さんを失われたわけですから」と、刑事は通り一遍の言葉を吐いた。

続いて、警察署に出向いた用件を着々と済ませた。警察が預かっていたと言うより押収していた弟の所持品と、弟の部屋から持ち出したらしい物品を、書類と照合しながら受け取る。用意されていた大きめの紙袋に返却された物を詰め込む。署名と捺印をする。「ご苦労さまでした」刑事が軽く頭を下げ、ドアのほうへと手を伸ばした。

納得がいかない。なぜ？

東京に向かう新幹線の中でずっと考えていた疑問のはけ口が、今消え去ろうとしている。不満と怒りが混じり合った発作が今にも起こりそうな気配を感じた。

こんなんで終わりになるわけ？　一件落着？

「では、そろそろ」

すでに次の仕事に取り掛かろうとしている素振りの刑事に、わたしは詰め寄った。「一通りお話をうかがうまでは、わたしは帰りません。これまでに分かったことを、一つひとつ順を追って説明してください」

「いいですか、島田さん、あれは事故だったんです。事件性はありませんでした」

「そんな言葉だけでは、とうてい納得できません」

「事故を調べている保険会社の人みたいですね」

刑事の言葉が嫌な記憶を呼び覚ました。

「保険会社は、名古屋の家にまで人を送り込んできて調査をしました。事故に自殺と心中の疑いがあるとか言って――。母を一番苦しめたのは、あの人たちです。母を今のような精神状態に追い詰めたのは、あの人たちなんです」

実際、亡くなった光太について、触れたくもなく言葉にしたくもない部分にまで容赦なく踏み込んできたのは警察ではなく、亡くなった運転者の加入していた生命保険を扱っている会社の調査員だった。名付けたくないものを言葉にすることが暴力であることを、わたしはあの時初めて知った。

「あちらさんとしては、大金を払わなければならない立場にありますから必死です。失礼で酷な言い方になりますが、それが商売なんです。病院でＨＩＶの抗体検査の結果まで調べているんですから……」刑事は腕時計を見た。自分は忙しいのだというポーズだろう。「現在では、あらゆる事故であの種の検査をするのが常識になっています。救急車に乗り込む人たち、そして事故の処理と捜査に当たる私らも、血液や体液に触れたり浴びたりしますから、細心の注意を払います」

今わたしが通っているスポーツジムの会員で、歯科医院に勤務している女性がいる。いつの間にか口を利く間柄になった。会話の中でエイズの話題が出たことがあった。医師を始めスタッフ全員が、感染予防には相当気を使っているという。「曝露（ばくろ）」という言葉も、その女性から教えられた。

「その点は、ご理解していただけますね？」刑事はなだめるような声を出して言った。

自分では理解しているつもりだったが、『あの事故の犠牲者たちの場合は、特に訳ありでしたからね』と言っている裏の声が聞こえてくる気がした。自分が被害妄想的な精神状態に陥っているのを意識しながらも、わたしはかなり強い口調で刑事に説明を求めた。

刑事は譲歩した。「分かりました。正直申しまして、私も現時点で複数の事案をかかえ

ている身ですので、手短にお話しします」

刑事は自動車事故については事実だけを淡々と述べ、自分たちが調べ上げた弟の私生活と日々の行いについてはほのめかすような言い方で語った。

説明は、とうてい満足できる内容ではなかった。事故については興味がなかった。弟の光太に関する疑問だけが大きくなっていった。事故が単なる事故であり、事件性がないことさえはっきりすれば、警察の仕事は終わりになる。自殺と心中という想定も消えたとなれば、保険会社の調査員もそれ以上追及することはない。

いったい、光太は東京で何をしていたのだろう。何を求めて、あれほどまでに上京にこだわったのか。予想はつく。ただ、単なる推測や空想では終わらせたくない。曖昧な死なんて、わたしには受け入れることはできない。

光太の部屋を引き払った後も、しばらく東京に残ろう。

わたしは決意した。その裏には、母から逃れて一人になりたいという思いがあった。わたしも疲れていた。このまま家に帰れば、母とわたしは同じ色に染まっていく。それは危ういことだという気がした。

母一人を名古屋の家に残したまま東京に留まることに、後ろめたさを感じなかったわけではない。息子の突然の死によるショックと、別居中の夫と久しぶりに会ったことによる精神的な揺らぎに加えて、保険会社の調査員から執拗な質問を受けた母は、一時は錯乱寸前まで行った。

わたしが強引に連れて行く形で、とりあえず心療内科で受診させた。医師には、わたしが主に事情を説明した。気分を落ち着ける薬を処方された。なぜか、わたしにも同じ薬が出た。

家では母と娘の役割が逆転した。母の思考と行動は幼児のようになり、わたしを母親のように慕った。常に誰かが一緒にいてやる必要があった。わたしが大学に行っている間は、母の姉である光枝おばさんが来て家にいてくれた。伯母が帰ると、母はわたしのそばから一時も離れない。お風呂も二人で入り、同じ部屋で寝た。夜間に起され、トイレにまで付き添わなければ用が足せないのには閉口した。

最悪の状態からいくぶん回復し、何とか精神の均衡を取り戻した母は、このところわたしを相手に弟が小さかったころの話ばかりをするようになった。

上京した息子が、初対面らしい男性の車の助手席で事故に遭った。確かに不可解な死に方だ。十九歳の誕生日を迎えることができなかった息子の死は忘れ、これから先は幼かった息子の思い出と共に生きていこうとしている。母を見ていると、そんなふうに思える。

わたしは、弟の記憶をその骨と一緒にこのまま葬り去る気にはなれない。母にとっては今さらほじくり返して言葉にしたくもないものを、わたしはあえてほじくり返し、自分の目で見極めてみたい。そのためには、この大都市に残って歩き回る必要がある。時には、生前の弟を知る関係者と直接会って話を聞かなければならないこともあるだろう。

明日のこの時刻には、この部屋は生活感のない、ただの空き部屋になっているはずだ。
わたしは部屋の様子を心に刻み付けておこうと、辺りを見回し立ち上がった。弟がきっと毎日そうしていたように、部屋を横切る。キチネットの前に向かう。備え付けの棚を開ける。かがんで床に触れてみる。バスルームに入る。水道の蛇口をひねる。鏡に自分の姿を映す。シャワーカーテンを引く。
携帯電話の音がした。慌ててバスルームを出て奥の部屋に入り、机の上に置いておいた弟の携帯電話をつかむ。
液晶には「タカ」と表示されている。通話ボタンを押す。
「もしもし、ヒカル？」
「もしもし――」言葉に詰まる。「わたし、島田光太の姉ですけど、あなたは光太のお友達ですか？」
「周りがうるさくてよく聞こえないんだけど、ヒカルじゃないの？　ひょっとして女の人？」
「姉です」
「うそー。本当に女？　からかっていない？」
「姉です」
そんな言葉しか出ない自分に戸惑う。
「ヒカル、そこにいる？」
「弟は亡くなりました」
「うそー。あんた誰なの？　ヒカルがいないんだったら、切るよ」
「ちょっと待って。弟のことを聞きたいんだけど――」
「別に大した用はないから、切る」
通話は切れた。たとえ話しても意味のない相手だと自分に言い聞かせる。
「タカはバカ」とつぶやく。それが駄洒落になっていることに気が付いた瞬間、なぜか大笑いしてしまった。なかなか笑いが止まらない。

電話帳検索で登録された名前と番号を次々と順番に見ていきながら、このうちの誰かに掛けてみようかと思い立った。でも、何て切り出せばいいのだろう。そもそも、まともに話せる相手なんているのだろうか。今のバカみたいな相手ばかりではないだろうか。
人づてや報道により、光太が死んだことを知っている者もいるに違いない。この携帯電話は二週間も警察署に置かれていたのだから、これが使われて警察から事情を聞かれた者たちがいてもおかしくはない。
いったい、わたしは何をしようとしているのだろうか。亡くなった弟について知ろうという行為は尋常なことなのだろうか。まず自分のやろうとしていることの意味について考える必要があるのではないか。母の心の状態を心配する以前に、自分の精神状態を案じるべきではないのか。わたしは疲れを感じた。
携帯電話が鳴った。今度は、わたしのミニバッグに入っているものだ。液晶に表示されている名は、岸川詩乃だ。
「香織？　どうしたの？」

「どうしたのって？」
「もう三十分も待っているのよ」
「……」この人、何を言っているのだろう。
「もしもし、大丈夫？　今、どこ？」
「弟の部屋」
「ちょっと、あなた本当に大丈夫？　約束忘れたんじゃないでしょうね」
「約束？」
「やっぱり忘れているみたいね」
「忘れてる？」一瞬、自分がどこで何をしているのかが分からなくなった。
「光太君の住んでいたアパートって、東中野だったわね。わたし、これから迎えに行く」
「ちょっと待って。考えさせてよ」

わたしは、一昨日の夜に、詩乃と電話で話した内容を思い出そうとした。詩乃には上京することと、その目的を話した。詩乃は自分のアパートに泊まるようにと勧めてくれた。わたしはその好意に甘えるつもりだったが、詩乃と会話をしているうちに次第に疲れを感じた。

詩乃がいろいろ心配してくれるのはうれしいが、その気遣いがかえってうっとうしく感じられてきた。それは覚えている。

途中で、何か理由をつけてホテルに泊まると伝えた記憶がある。でも、結局、ホテルに部屋の予約をすることはなかった。弟の部屋を訪ねるのが今回の上京で最後になるから、弟の部屋に泊まろうと思っていた。でも、夕食は詩乃とどこかで食べると約束したような覚えもある。

母には詩乃のアパートで泊まると言ってある。詩乃は高田馬場に住んでいる。ＪＲ高田馬場駅の交番の前で会う約束をした。そんな気もする。こうして詩乃が電話を掛けてきたのだから、最終的には会う約束をしたに違いない。時刻は、詩乃の言うように三十分前の午後六時半だったのだろう。

「――ごめん。部屋で荷造りをしていたら、時間の感覚が分からなくなっちゃった」

そうとしか言いようがない。母のことを笑えない。わたしも精神的に参っているようだ。きょう一日はいろいろなことがありすぎた。それに、今朝家を出る前に軽い食事をとったあと、この部屋にあったクッキー以外何も口にしていない。

東京までの新幹線の車内で考え続けていた、弟に関する謎の数々。斜視気味の刑事に執拗に迫って、ようやく聞き出した事故の概略。遺品である携帯電話やアドレス帳の処分についての迷い。女気のなさという、携帯電話に登録されたデータにまつわる新たな疑問。さまざまなことがあり、考えなければならないことが次々と出てきた。白昼夢にも似た経験の中で、弟との思い出にも浸りすぎた。そのために、肝心のやるべきことをすっかり忘れている。

それにしても、カーテンを通して浴びたオレンジ色の夕日がすごくきれいで快かった。その時、小学生のころの切ない記憶が呼び覚まされた。何かに促されて、光太の衣服を

身に着けてみた。光太が生きているような気がした――。
「もしもし？　急に黙り込んじゃって、どうしたの？」と、言う詩乃の声が優しい。「もしかして、あなた泣いているの？」
「ううん」と大きく首を横に振る。このところ子供返り気味の母とそっくりな動作をしているのに気づき、はっとする。「そんなことないよ。大丈夫」
「話し方を聞いていると、ずいぶん疲れているみたい。やっぱり、わたし迎えに行く。東中野のＪＲの駅って確か改札口が二つあるはず。光太君の住んでいたアパートは線路のどっち側、というか東中野の何丁目？」
　昨日名古屋で買った東京区分地図には何度か目を通した。自分がどこにいるかは、地図上でだいたい把握できている。ただ番地までは思い出せない。
「――引っ越しの荷造りをしていたんでしょ。賃貸契約書とか、領収書とか、書類がない？　住所を読み上げてみてよ」
　わたしは言われるままに、引っ越し業者が置いていった見積書にある、このアパートの住所を読み上げた。
「分かった。とにかく駅の改札口まで来て。そうねえ……。七時半までには行けると思う。念のために言っておくけど、地下鉄の駅じゃないわよ。ＪＲのほう。お互いに分からなくなったら、ケータイで連絡を取り合いましょう」

　今のわたしに必要なのは、人と会って喋ることなのかもしれない。誰かに甘えてみたい気もする。詩乃はしっかりした性格だ。母にわたしが必要なように、わたしにも頼る人が必要なのだろう。
　わたしは携帯電話や財布を入れたミニバッグだけを持って部屋を出た。風が冷たい。外階段を下りたところで弟の携帯電話を持ってくるのを忘れたのに気づき、いったん戻った。
　部屋に入るなり思った。
　明日の夜には、この部屋はからっぽ。そんなの許せない。
　デスクの上にあった引っ越し業者の見積書に目が行く。「年中無休」「二十四時間受付」という文字が見える。携帯電話を取り出し、その文字の横にあるフリーダイヤルを押した。
「――お引っ越し前日のキャンセルでございますね。申し訳ありませんが、即日契約の『お任せパック』のキャンセル料は、お引っ越し料金とほぼ同額になります。それでも、よろしいでしょうか」
「かまいません」
「失礼ですが、当社のサービスに対し、何かご不満でも？」
「いいえ、そういうわけじゃありません。ちょっと延期しなければならない事情ができただけですので」
「そうでございますか。延期ということでしたら、再び当社をご利用いただくという条件で、キャンセル料を割引するサービスも承っております」

　再び、外に出た。冷たい風がすがすがしい。さっき外階段を下りきったさいに感じた重苦しさが消えている。アパートの近辺は木々が多く暗い。街路灯を目指して早足に進む。
　空を見上げる。夕方に見た、あのきれいなオレンジ色のまばゆい光は、もちろんない。新宿方面を見下ろす道を駅へと急ぐ。空の底に当たるグレーの部分に、霞がかかったような赤みがさしている。水に混じって濁りを帯びた血の色に似ていると思った。

第 4 話　つながり

＊

九月の終わりの土曜日。午前二時五分ころ。雨が降りしきる世田谷区の道路。スピードを出しすぎた一台のボルボがカーブを曲がりきれずガードレールに追突した。

乗っていた二人の男性のうち、助手席に乗っていた若者は即死。運転していた若者は救急車で運ばれた病院で事故の七時間後に死亡した。運転者は車と所持していた免許証から身元が判明した。市川俊樹。二十六歳。会社員。

同乗していた若者の身元の確認は遅れた。身分証明書のたぐいを一切所持してはいなかった。血と骨と肉片にまみれ、ずたずたに引き裂かれたジーンズの前ポケットから一枚のメモ用紙が発見された。紙には書きなぐった多数の数字が書かれていた。その数字が謎となった。

血液で染まった紙は鑑識に回され、五組の携帯電話の番号らしき数字が判読された。そのうちの一組の数字は、車を運転していた市川俊樹の携帯電話の番号と一致した。その日のうちに四人の男性が警察から事情を聞かれた。

不明だった四人の男性たちのつながりの謎はすぐに解けた。事故の捜査に当たった警察官にとっては、振り出しに戻ったようなあっけない謎の解決だった。予想通りの結果となった。男性たちをつないでいたのは携帯電話の電波だった。その男性たちと即死した若者との関係は、担当の刑事には容易に予測がついた。

「この種のことに勘が働かないと分からない事件や事故は、割と多いんです」と、斜視気味の刑事は目をそらさず言い、ためらうように間を置いた後ずばりと聞いてきた。「ご存知でしたか？　　弟さんの素行について」

「素行」という言葉が、刑事とわたしを隔てる空間でぷよぷよ浮いているような妙な気分に陥った。両者の解する意味が食い違い、言葉がさまよっている。今は亡き人となったにせよ、この刑事は、光太という一人の人間のある部分を「素行」という曖昧で訳の分からない言葉で片付けようとしている。

当惑。怒り。もどかしさ。あきらめ。数秒のうちに、そうした感情が自分の心の中を通り過ぎていった。

この人に食ってかかっても仕方ない。この人だけではない。多くの人にとって、光太や光太とかかわった人たちの生き方は、たとえば「素行」とか「性向」とか「性癖」、またはせいぜい「傾向」や「資質」という言葉で名指すしかないものなのだろう。

「――ご存知でしたか？」

「はい」と、わたしは泳ぎかけていた視線を刑事の目に戻してうなずいた。「おっしゃっていることが、どういう意味なのかは承知しています」

「なるほど」
　なるほど？　　何て間の抜けた返事だろう。わたしは込み上げてきた笑いを押し殺した。このところ、不意に笑いが出てきて止まらなくなることがよくある。
「話がしやすくなりました」と言い、刑事は話を続けた。

　事故の担当者たちは、予測をもとに調べを続けた。四人の男性たちは全員、事故の前日に携帯電話でアクセスするある種の掲示板に、メッセージと自分の連絡先を書き込んでいた。四人に共通するのは、十八歳の「ヒカル」という少年から電話をもらったということだった。しかし、四人とも「ヒカル」には会っていない。
　四人のうちの一人が、同じ「ヒカル」と名の少年について聞いたことがあると警察官に語った。その男性の知り合いがヒカルという少年の噂をしているのを聞いた記憶がある、という話だった。警察はその知り合いの男性とも連絡を取った。
　その男性は、一度だけヒカルという少年と会ったことがあった。その時、少年の住むアパートの近くまで車で送って行ったという。男性が少年を車から降ろした付近で警察が聞き込みをした結果、ヒカルと名乗っていた少年の本名が判明した。
　島田光太。十八歳。予備校生。愛知県名古屋市出身。

　わたしは刑事の話を小説のように聞いていた。その物語の主人公が、双子のように生活を共にしていた弟とは信じられなかった。事故については、名古屋市で発行されている新聞では、一紙だけが事故当日の夕刊に小さく報じただけだった。数日後、図書館で複数の全国紙を調べてみると、二紙が事故翌日の朝刊に簡単な記事を載せていた。現在警察が即死した同乗者の身元を確認中である、という共通した記述があった。
　光太が交通事故で死んだという知らせが警察から母とわたしの住む名古屋の家にもたらされたのは、事故の翌日である日曜の午後だった。別居中の父にはわたしが電話で連絡した。母は母の姉と一緒にただちに上京し、父はそれとは別に東京へ向かった。

「悲しい話。悲しすぎる」
　斜視気味の刑事から聞いた詳細を中心に事故とその後の出来事の概略を語ると、岸川詩乃はつぶやき、目頭の涙をティシューでぬぐった。
「わたしとしては、ある意味ではすっきりした部分もあるの。弟がどんなふうに亡くなったかは、あの刑事さんと直接会わなかったら、おそらく永遠に知ることはなかったわけだから。その意味では、今回の上京は正解だったと思う」
「それで香織の気持ちがいくらかでも収まれば、そうかもしれない。でも、その刑事さん、よくそこまで話してくれたわね。聞いていて苦しくなかった？」
「わたしが無理やり話させたって感じね。別居している父の性格からして、この件に関して上京することはまずないし、お母さんはあんなだし。刑事さんもそうした事情を承知しているから、姉のわたしに話してくれたんじゃないかな。それに、あそこまで踏み込んだ話になったのは、あの刑事さんの言葉を借りれば、光太の『素行』について知っているって、わたしがはっきり言ったからだと思う。きっと、そうよ」

「光太君と香織って、本当に仲が良かったもんね。わたしなんか、兄がいるけど、すごく仲が悪かったの。兄はもう結婚して家を出ているから、過去の話だけどね」
「確かに他人の目からは不思議なというか、怪しい姉弟に見えたでしょうね」わたしは無理に笑顔を作って言った。
「そこまでは言わないけど」詩乃はティシューをいじりながら言った。
　わたしは弟の携帯電話を見た。何度見たか分からない。誰かから電話が掛かって来ないなら、こちらから掛けようという気持ちが再度頭をもたげてくる。でも、きょうはこのまま、詩乃の部屋でおとなしく眠ろうと思う。
「ごめんね。ベッドを占領しちゃって」
　床に予備の布団を敷いている詩乃に謝り、弟の携帯電話の電源を切る。
「遠慮は抜きでいこうよ。それとも、一緒に寝る？　　寂しかったら、横に寝てあげようか？」
「大丈夫」
「今だから言うけど、東中野の駅で会ったときの香織って、すごく疲れた顔をしてたよ。それに寂しそうだった」
「あれから、よく食べたよね」自然に笑顔になれた。「きょうというか、こんな時間だから、もう昨日のことだけど、朝からほとんどお腹に入れていなかったんだもん、薬以外は。疲れるし寂しそうな顔もするわけだ」
「食事の後に飲んでいたお薬。あれって、何なの？　　あの時には聞かなかったけど」
「気分を落ち着ける薬なんだって。お母さんを心療内科に連れて行ったら、わたしまで処方せんをもらっちゃった」

＊

　弟の部屋に戻ると、やはり引っ越しを延期してよかったと思った。もう少しこの部屋にいてやることが、この部屋に残っている弟の霊とは言わないまでも、弟の思いへの弔い、そしてこの部屋に対するお礼にもなる気がした。
　最終的には同じ業者の「お任せパック」を依頼するにしろ、弟の愛用した物たちをこの手で段ボール箱に収めてやりたい。弟の部屋を片付けて掃除をし、この部屋から去りたい。もう少し、ここにいたい。いてやりたい。
　近くのコンビニで買ってきたお弁当を電子レンジで温めていると、弟の携帯電話が鳴った。
　画面には「森本アツシ」という名が表示されている。
「ヒカル？」
「あのう――。わたし、ヒカル、つまり島田光太の姉です」
「マジ？　　ヒカル、おれのことをからかってない？」
「いいえ、わたし、姉です。このまま切らないでお話を聞かせてもらえませんか？」
「……」
「お願いです」

「お願いと言われても。で、どうしてお姉さんが、この電話に出てくるんですか？」
　ようやくまともに話ができそうな相手から掛かってきたという予感がする。
「実は、光太が亡くなりました」
「なくなって、死んだってことですか？　マジで？　いえ、すみません。本当ですか？」
　森本アツシは、光太とは同じ予備校の生徒らしい。最近、見掛けないので何となく電話をしてみたという。
「生前の弟がいろいろお世話になりました」
　形式的な挨拶をして、電話を切った。
　がっかりした。わたしが話したい相手とは違う。

「電話帳検索」には、たくさんのデータが登録されている。それにもかかわらず、ほとんど電話が掛かって来ない。どういうことなのか？　登録されている番号の持ち主たちが、光太の死を知っているとしか考えられない。みんながつながっていて、知っているのだ。
　さっきの森本アツシからの電話に出たことで、こちらから電話を掛けたさいに自然に響くと思われる文句が頭に浮かんだ。
『亡くなった弟の携帯電話が残りましたので、電話帳に登録されているお友達にお礼の電話を掛けているところなんです。生前の弟がいろいろお世話になりました』
　くじを引くようなつもりで、無作為に名前と番号を表示させ、通話ボタンを押した。
　呼び出し音が五回鳴り終えたのを聞いた。相手は出ない。どうしても通話できない状態で、止むを得ず放置しているのか？　または、液晶の表示を見て「死者」からの電話に出ようか、それともこのままにしておこうか迷っているのか？　わたしは呼び出し音を聞き続けた。
　十回目の呼び出し音が鳴り始めようとしたとき、電話がつながった。驚いて、「あっ」と声を出すところだった。
「……」
　相手は喋らない。こちらが誘導する形で、あらかじめ考えていた言葉を口にするしかない。
「もしもし、突然、申し訳ありません。わたしは島田香織と申します。島田光太の姉です。亡くなった弟の携帯電話が――」
「えっ？　ヒカルのお姉さんなんですか？」
「はい。あのう、お願いですから切らないでください」
「びっくりした」
「ごめんなさい」
「幽霊かと思った。声が似ていたので」
　しばらく弟と一緒に暮らしていなかったため、とっさにはぴんと来なかったが、思い出した。電話で聞くと、わたしと光太の声は似ているらしい。名古屋の家の固定電話に掛かってきたときに出ると、よく間違えられた。
　弟が声変わりをする前には、まったく同じ声に聞こえると言われていた。声変わり以後、弟は普段は低めの声で喋っていたが、電話ではやや高めの声で話す癖があった。逆

に、思春期以後のわたしは電話に出るときには緊張するせいか、声の調子が沈んで低めに聞こえるという。その結果、よく似た印象を与えるらしい。
「そんなに似ていますか？」
「今聞いているとそうでもないんですけど、最初の声を聞いたときには、マジでビビッちゃいましたよ」
　話している相手は前田隆平という名で、光太とは新宿で知り合ったという。
　ヒカルが死んだというニュースは、仲間うちですぐに広まった。また、あの日に車を運転していて死亡した市川俊樹の知り合いの間でも、話はたちまち伝わった。携帯電話からアクセスする掲示板を利用していた四人の男性たちを警察が事情聴取したことにより、一時は関係者たちにとって二人の死は「大事件」になった。前田隆平は、そう語った。
「だから、このケータイに誰も掛けてこないんですね」
「でしょうね」
「予備校のお友達から掛かってきたくらいです」
「そうだ、ヒカルって予備校生だったんだ」
「ご存知じゃなかったんですか」
「いえ、そういう意味じゃなくて、ヒカルと予備校というのが結びつかなくて……。けっこう有名人だったからなあ」
「有名人？」
「もてたというか、人気があったってことです。悪い意味じゃないです。そのケータイには、ものすごい数の番号が登録されてるでしょう」
「ものすごいという感じでもないですよ」
「要らないのは、どんどん削除していったんだろうな。ところで、そのケータイ、警察の所に持って行かれていたんでしょ？　　やばいなあ」
「やばい？」
「つながりが、ばれちゃうじゃないですか。おれたちの人権とか個人情報の保護に熱心な人たちが、グループを作って活動しているんです。で、警察はおれたちみたいな人間のセクシュアリティや、ほかのマイノリティの情報を、裏で集めているっていう噂を聞いたことがあって……」
「セクシュアリティ」という言葉を耳にし、わたしは斜視気味の刑事が口にした「素行」という言葉を思い出した。
　セクシュアリティという言葉は雑誌で見かけたことはある。見かけても深く考えることはなかった。話し言葉の中で耳にしたのは、今が初めてかもしれない。だいたいの意味は分かる。でも、自分や身近な人とかかわる言葉だと実感したことはない。
「セクシュアリティ」と、わたしはつぶやいた。
「えっ？　　そう、セクシュアリティです。先月、こっちの世界で覚せい剤がらみの事件があったときに、なぜかおれの所に急に警察官が訪ねてきたことがありました。逮捕されたやつはクロだった。それはそれでいいんです。身から出た錆ですから。でも、おれ、そいつとは一回会っただけですよ。それも五年以上も前に。やっぱりクスリがらみで、そいつは何度か警察の調べを受けたことがあるらしいんです。以前にそいつのケータイにおれの番号があったから、つながりを疑われたとしか思えません。絶対に警察はこういう

データを集めています。一度入手したデータは破棄しないと考えるほうが賢明でしょう」
「何だか怖いですね」
「指紋と同じですよ。たとえば、どこかの店で働いていたとします。夜間、そこに泥棒が入った。任意で指紋を採取させてくれと警察から言われれば、自分が犯人でないことを証明するために承知するのが普通ですよね。その時に採られた指紋って、一定期間が過ぎたら破棄されると思いますか？」
「さあ？」
「ＤＮＡ鑑定でも、そうです。自分の潔白を証明するために、任意の形で毛髪を採取されたとします。その情報というかデータは、事件が解決したら破棄されると思いますか？」
「……」
「すみません。話が飛んじゃいました。いずれにせよ、そのケータイのデータは、削除してしまったほうがいいんじゃないですか。差し出がましいかもしれませんが、おれはそう思います。ヒカル、パソコンを持っていませんでしたか？」
「わたし、今、弟の部屋を引き払うために上京しているんですけど、部屋にパソコンはありません」
「そうですか。万が一、ノートパソコンとかネットにつなげる小型の端末でも出てきたら、メール関係のデータは削除しておいたほうがいいかも」
「分かりました。気を付けておきます」
「でも、ああいうものは削除したとしても、その手の技術に詳しい人なら修復できるんですけどね」

　この電話で十分だった。光太の残した携帯電話に登録された番号に掛ければ、わたしは歓迎されない電話の相手となるだけだ。データは消そう。一気にデータを削除することもできるが、いくらなんでも味気ない。おそらく、うれしそうに一件ずつ入力していった弟に悪いような気もする。
　左手の指を使ってデータの削除を始めたとたん、気分が沈んできた。個人情報を消すというのは気持ちのいい作業ではない。心に痛みを覚える。ピッピッという機械音が耳と神経に障るので、ミュートにした。次々とデータを消していて思った。エアキャップをプチプチ潰すのにどこか似ている。

第 5 話　大丈夫

＊

「本当にいいんですか」
　店に備えてあるヘアカタログで髪型を指定すると、男性の美容師はハサミを入れる前に念を押した。気心が知れない初めての客に対するマナーの一つなのかと想像する。
「ばっさりとお願いします」
　わたしは努めて明るい表情を作りながら答えた。美容師の探るようなまなざしが瞬間的に笑顔に変わった。失恋後の気分転換に髪を思い切り短くする女には見られたくない。
　弟は亡くなる数日前に携帯電話でメールと画像を送ってきた。髪型を短くしたから見てくれというものだった。
『ちょっとレトロな感じだけど、ロンドンで流行っているんだって。気に入ってまーす』
　そんな内容のメールと一緒に送られてきた写真二枚には、それまでの長めだった髪をばっさりとカットした弟の澄ました顔が映っていた。一枚は正面から、もう一枚は左斜め上に自分で携帯電話を掲げて撮ったものらしい。

　弟は、普段はよく笑うくせに、カメラの前ではめったに笑わない。家にある写真のほとんどがそうだ。事故死したという知らせを聞いた直後、身内だけの葬儀で使う写真を選んでいたさいに気づいた。幼いころの写真もそうだ。弟と並んでいるわたしも笑っていない。
　一方で、学校の修学旅行や遠足に行ったさいに撮られた写真では、弟もわたしも笑っているものがある。家族写真に見られる笑いの不在――。改めて考えてみると不思議な話だ。今になって知った発見とも言える。現在、父が別居して実家にいないことの芽、あるいは兆候だったのかとも思える。振り返ってみると、わたしたち姉弟が幼かったころから両親の仲はぎくしゃくしていた気もする。これは、写真選びをしていて初めて意識したことだった。

　美容師はためらいのない自信に満ちた手つきで容赦なく長い髪をカットしていく。髪は黒いかたまりとなってぽたりと落ち、首から下を覆うビニール製のカットクロスの上を、生き物めいた動きで恨めしそうにズズっと滑り降りていく。
　美容師には、初めての客に対する礼儀と用心深さが感じられる。まだまだ日中は暑いですね――から始まって、カルテにはご紹介者が書かれていませんでしたが私をご指名くださったのはどうしてですか――、学生さんですか――、ご出身はどちらですか――

と、手を休めずに尋ねてくる。初対面の気安さもあり、この店に二度と来ることはないだろうという気持ちも手伝って、わたしはいい加減に答えた。
　バックとサイドを刈り上げてもらい、シャンプーのために立ったとき、床に落ちている髪の量の多さに驚いた。
「前の状態に戻してちょうだいなんて、おっしゃらないでくださいよ」
　わたしの気持ちを察したのだろう、美容師が笑顔で言った。
「大丈夫です」と答える。

　シャンプー台で髪を流し鏡の前に戻って初めて、わたしは別人になった自分と対面した気分を味わった。髪が濡れたままの鏡の中のわたしはずいぶん幼く見える。懐かしい顔だった。懐かしさは弟との類似から来ていた。小学校の高学年ころの弟に似ている。
「島田様、少々お待ちください」
　ほかの従業員に呼ばれた美容師が離れた瞬間、わたしは密かにある顔を作った。眉を寄せて下唇をかむ。悔しいときや何かに熱中している最中に、弟がよく見せた表情だった。亡くなった弟の思い出の中で、一番好きなものの一つだ。どこか頼りなげで抱き締めたくなるような顔が鏡に浮かんでいる。
「どうかなさいましたか？」
　美容師の声がさっきとは反対側からして、わたしは驚いた。店内の造りが分からない。慌てて顔を戻す。
「もしかして、イメージが違うとか？」
「いいえ、すごく気に入っています」
　本心だから自然に笑みを浮かべることができた。
「島田香織様ですよね？」
「はい」
「ご親戚の方が、うちの店をご利用なさっているなんてこと、ありませんよね」
「……」
　弟のことを話そうかどうか、わたしは迷った。
「失礼なことを申し上げているのかもしれませんが、同じ名字の方で、似たお客様がいらっしゃるんですよ」
「ばれました？」
「やっぱり」
　美容師はかん高い声になって両手を胸の前で合わせた。
「わたし、島田光太の姉です」
「うわあ、びっくり。いえ、本当は途中でそんな気がしたんです。まず、この髪型はヨーロッパでは最新のものなんですけど、少しレトロっぽいんで選ぶ人はあまりいません。カタログからこのスタイルを選ぶお客さんは、個性的なタイプの方ばかりです。で、名字を拝見してあれっと思ったんです。それに、カルテのご紹介者の欄に何も書いてないのも変だなと思いましたし、さきほどお尋ねしたさいにも、はっきりとしたご返事がいただけなかったので」

「怪しいなとか？」
「そうそう、そんな感じしました。ひょっとしてひょっとするんじゃないかなんて、カットしながら実は勝手に想像していたんですよ」
　きょう、弟の部屋を片付け終えたわたしは、化粧を落とし、長く伸ばしたうえにヤスリで形を整えていた爪を切り、上も下もすべて弟の衣類を身に着けて外に出た。アパートを管理している不動産屋を訪ねて用を済まし、電車と地下鉄を乗り継いで表参道に着いた。
　東京区分地図で確かめておいた目標のビルを探し、そこから番地の表示を頼りに電話で予約しておいた美容室に着いたときには、午後六時を過ぎていた。美容師は、弟の部屋にあった美容室のカードに記されているのと同じ人を指名してあった。

「うん。やっぱり似ていらっしゃいます」
「そうですか」
　ブローに入ると、美容師はひっきりなしに話し掛けてくる。『もうわたしたち、お友達でしょ』とでも言いたげな調子が気に入らなかったが、美容師の腕は確かだった。客の気持ちを読み取る感覚も鋭い。わたしが名古屋でいつも利用している美容院の二倍近い料金を取るだけのことはある。
「さっき、何か考えごとをされていませんでした？　　あの時の表情がそっくりでした。髪型を選んでいただくさいに、お客様にカタログをお見せしますよね。そんなときに、サンプルの写真を見ながら考えるじゃないですか。それとか、最後にこちらが、『いかがですか？』なんて尋ねると、お客様が鏡に向かってこんなふうに顔を左右に振って見栄えを確かめるじゃないですか。そんなときの弟さんの表情にそっくりなんで、余計に驚いたんです」
　ときおり作業の手を休め、身ぶりと手ぶりを交えながら美容師は早口に喋る。声と仕草が、急に女性っぽくなったように感じられる。それにしても、手際がいい。ドライヤーを当てていく髪に不揃いはまったくない。
　わたしは美容師の指の動きに見とれていた。形のいい指だった。弟の指の記憶がよみがえった。弟に生まれつき備わっている物のうちで、わたしがとりわけうらやましく思ったものが指だった。薄桃色に光る細長の爪を弟が持って生まれ、わたしには形の悪い短い爪しか授けられなかったことが理不尽に思えてならなかった。
「それとですねえ」と美容師はなおも口早に話を続ける。「髪を切りますよね。当然、お客様の頭に触れることになります。シャンプーの時なんか、もろにそうなんですけど、頭に触れていると手が覚えているってことがあるんです。ああ、このお客様の頭に以前触れた覚えがある。そんな感じがする場合があります」
「すごい。奥が深いんですね」
「いえいえ、奥が深いなんて大げさなものじゃないんですけどね。むしろ、こういうのは動物的な勘ですよ。で、香織さんの頭に触れたり指で押さえたりしているうちに、ぴんと来たんですよ」

「弟に似てるって、ですか」
「ええ。びびっと感じました」
「本当ですか？　　そんな話を聞くと感動しちゃいます」
　一瞬涙が出そうになったが、なんとか抑えた。
「骨相学ってご存知ですか？」
「『こっそうがく』？　　『骨』と人相の『相』に学問の『学』という字ですよね」
「はい。わたしが前にいた店のスタッフで、頭の形にものすごく敏感な人がいました。いろいろ勉強もしていたみたいで、結局、今は美容師を辞めて骨相学を基本にした占い師をやっているそうです」
「へーえ」
　頭蓋骨の像が目の前にちらつき、わたしは軽い吐き気を覚えた。それを察したのか、美容師は素早くに話題を変えた。
「ところで、光太さん、お元気ですか？　　まだうちにカットにいらっしゃるのには早いと思いますけど」
「元気にしていますよ。東京での予備校生生活をエンジョイしているみたいです。名古屋からわざわざ出てきて」
　とっさに、わたしはそう答えていた。弟は生きていて、今もあの部屋に住んでいる。夢と空想がそのまま口から出たのかもしれなかった。美容師は、あははと声を上げて笑った。
「そうかそうか」と、美容師は一人で納得したように、何度もうなずきながら言った。「確かにおっしゃっていました。やっと今になって、思い出しました。お姉さんが名古屋にいらっしゃるという話。すごく仲がいいとか――。ごめんなさい。こういうお客様にとって大切なことを、よく忘れてしまうんですよ。根がアホやから」
「アホ？」
「わたし、出身は関西なんです。向こうにも美容師を養成する学校はあるんですけど、どうしても東京に行きたいって、親に向かって土下座するやら、泣いて訴えるやら、脅すやらして、こっちに参りました」
「弟と一緒ですね。光太も、東京に行きたい、東京に行きたいって、わめきまくって親を説得したんです。東京はお好きですか」
「うーん。好きでした」と言った美容師の目とわたしの目が鏡の中で合った。「どうして過去形なのかというと、年ですかね。こういう仕事は、最終的には自分の店を持つことが目標です。そのための貯金も、組合で強制的にさせられています。その目標が、だんだん具体的というか現実的に感じられるようになってきますよね。そうなると、考えちゃうんです。東京で勝負できるか？　　なんて感じで。えらい深刻な話になってしまいました。弟さんなんか、毎日が楽しくて仕方ないんじゃないですか。だいいち若いんだもの」
「予備校生ですよ」
「そうでしたね」
　わたしたちは同時に笑った。この東京どころか、この世に光太がもういないとは信じられない。わたしは鏡の中の自分を見る。

『光太は女にしても美人だけど、香織は光太の出来損ないみたいね』
　そんな無神経な言葉を吐いた親戚の女がいたことが思い出される。あれは確か、光太とわたしが七五三か何かの祝いでよそ行きの格好をさせられていたときだ。あの日に撮った写真が、家にあるはずだ。
　鏡に映っているのは「光太の出来損ない」だが、本物のちゃんとした光太があの部屋にまだ住んでいるような気がしてならない。
「人生で一番楽しい時期に憧れの東京にいる。それだけで幸せですよ」と美容師は言い、急ににやりとした笑みを浮かべた。「お姉さんだという身元が割れたところで、一つ質問させてください。どうして、髪を切る気になったのですか」

　そう尋ねられたわたしは、言葉に詰まった。自分でもよく分かっていない。光太の部屋でこの美容室のカードを見つけた瞬間、光太が送ってきたメールと画像が頭に浮かび、深く考えることもなく予約の電話を入れていた。『あなた、今、生理前か生理中？』二日前に、岸川詩乃から言われた言葉が頭に浮かぶ。あの日にわたしは午前の早い時間に東京駅に着いた。
　すぐに電車を乗り換えて世田谷区にあるＳ警察署に出向き、事故死した弟の持ち物を受け取った。しぶる刑事を強引に説得し、事故の背景についての説明を受けた。
　午後からは、東中野にある弟の住んでいた部屋の引っ越しの見積もりを業者にしてもらい、翌日に荷物を運ぶという段取りをつけて即座に契約をした。疲れのためにぼんやりとした状態で荷造りに取り掛かり、弟の携帯電話の電話帳検索を見ていて男の名前ばかりだなあと思ったりしているうちに、夜になった。
　すると突然、携帯電話に詩乃からの通話があり、会う約束をしていたらしいと気づいた。迎えに来てくれると言うので、東中野の駅に向かおうとした。途中で引き返して、引っ越しのキャンセルと延期を業者に告げた。
　駅の改札口で待っていた詩乃が、わたしを見るなり小声で口にしたのが、「あなた、今、生理前か生理中？」だった。
「ううん、そんなことない」
「顔色が悪いよ。きょうは、ずいぶん無理なスケジュールだったらしいから疲れたんじゃない？」
「ううん、そんなことないよ。大丈夫だってば」
「強い頭痛薬でも飲んでるんじゃない？　　ろれつが回らない感じがするけど」
「それより、わたし、お腹がすいちゃった。ぺこぺこ」
　その夜、高田馬場にある詩乃のアパートに泊めてもらった。翌日の早朝まで話し込んだ。その時に、心療内科で処方された薬を飲んでいることも話した。
　確かに、このところ、体だけでなく心も疲れている感じはする。でも、気分を落ち着けるらしい薬を毎食後に飲んでいるのだから大丈夫だと思う。時々意識がぼんやりしたり、自分でもあれよあれよという感じでびっくりするようなこともするけど、きっと大丈夫だ。

「――一つ質問させてください。どうして、髪を切る気になったのですか」鏡の中の美容師が言っている。
　どうしてだろう？
「――久しぶりに会ったから、記念にツーショットの写真を撮ろうということになったんです」
「わざわざ同じ髪型で、同じような格好をしてですか？」
「そうです。その乗りで――。ご存知だと思いますけど、弟はすごく能天気ですから」
「そりゃ傑作だ」
「今度お店に来たら、思い切りからかってやってください」
　すらすらと嘘が出てくるのが快い。弟と並んでカメラに収まるという考えも楽しい。空想ってわくわくする。鏡の中で美容師もわたしも、声を出して笑っている。楽しそう。自分のことなのだけれど、他人事みたいにも思える――。でも、大丈夫だ。

第6話　変わる

＊

カットクロスが取り去られ、椅子に腰掛けた全身が縦長の鏡に映っている。最後に美容師は前髪の生え際を少量のジェルで固めて、撫でるような手付きで髪をさっと上げた。

鏡の中には少しほおが張っているが、弟によく似た顔立ちの少年がいる。ゆったり目のシャツは洗濯されたものだが、ジーンズはクローゼットから出てきたままで洗っていないものをはいている。

約二カ月前のお盆に帰省した弟は、これと同じ格好をしていた。目の前の髪型に比べれば、だいぶ長かった。わたしは携帯電話の不用なメールや画像はこまめに消すほうだが、弟が死の数日前に送ってきた画像だけは残してあった。虫が知らせたのかもしれない。髪を思い切り短くしたという報告のメールと写真。

メールチェックの振りをして携帯電話を取り出し、見比べてみたい衝動に駆られる。だが、ここでそうするのは、さすがにはばかられる。

お盆休みに久しぶりに再会したときには、弟の流行に媚びないおしゃれな格好と洗練されたヘアスタイルを目にして、わたしは予備校生である身の弟の今後を案じたものだった。上京してからの弟の金遣いの荒さについては、母も嘆いていた。

「お時間があれば、こちらでお飲み物でも」

美容室のスタッフに声を掛けられ、わたしはレジの近くに設けられた小さなラウンジに案内された。ガラス張りの店内から見える外の光景は、もう夜のものだ。外に出るのが怖いような気もする。テーブルを挟んで斜め向かいに座った女性が、ラストの客らしい。目と目が合う。不思議そうな表情をされた。どういう意味の表情なのか気になったが、無視する。

変身直後の興奮を冷ますために、出された紅茶を時間を掛けて飲む。鏡に映る自分を目にしていても、どこかまだ夢を見ているようなもどかしさがあった。問題は外に出てからだ。まわりから、どう見られるのだろうか。

ラストの女性がコーヒーを二口飲んだだけで、レジへと向かう。わたしがラストになってしまった。店内の時計が八時になろうとしている。わたしはようやく席を立つ気になった。

支払いを済まし、預けていたジャケットとショルダーバッグを受け取る。どれも弟の部屋にあったものだ。

「外へ出たら、完璧に男の子と間違えられますよ」

ドアまで送って来た美容師が言う。

「悔いはありません」

自分でも驚くほど明るい声が出た。声の調子から、自分がはしゃいでいるのを感じる。

「名古屋にお帰りになったとき、彼氏、びっくりするんじゃないですか？」
　わたしの満足を感じ取ったのだろう、美容師の声もはしゃいで聞こえる。
「彼氏ですか？　　実は彼女だったりして」
　はしゃぎすぎの自分にあきれる。
「じゃあ、今度、そのカノジョさんと上京なさったさいには、ぜひご一緒にご来店ください。お待ちしております」
　美容師とわたしは、同時に声を出して笑った。

　外は意外に寒かった。東中野にある弟の部屋から出たときには、このシャツとジャケットでよかったが、今は風も強く、マフラーが欲しい。髪を切ったために首から上が特に寒い。
　歩いている自分の動きは、いかにもぎこちない。化粧を落とし、男物の衣服を身に着けて外出したものの、髪を切る前はまだ自分は女に見えるという確信があった。いざ髪を短くして通りを歩いていると、男性として振る舞おうにもその心構えが出来ていないのを感じる。
　おどおどした態度に見えるだろう。男とも女とも知れない者が、人通りの多い夜の繁華街をぎこちなく歩くさまは、さぞかし滑稽に違いない。そう考えると緊張し、足が重くなる。
　花屋の前に差し掛かる。店は閉店の間際で、シャッターが下りるところだった。一個だけ外に置かれたままだった鉢を店内に入れようとする女性の店員とまともに顔を合わせた。じろじろ見られることもなく、わたしはほっとした。
　ごく普通の少年か若い男性に見えると思ってよさそうだ。心配することはない。わたしは心の中で自分に言い聞かせる。
　シャッターの下りた花屋の軒先で立ち止まり、目線を上げる。美容室を探してこのあたりを行ったり来たりしていたときには、まだほんのり明るかった空が真っ暗になり、表参道の街はさまざまな人工の明かりできらめいている。
　わたしは花屋の前で人を待っているように装いながら、通りを歩く十代くらいに見える少年から二十歳前後の男性の歩き方や表情を観察した。真似る気になってよく見ていると、明らかに女性とは違っている。
　まず、靴の違いが動作にもろに出ているのに気づく。今、わたしは弟のスニーカーを履いている。昨日、初めて履いてみて、サイズがピッタリなのに驚いた。歩くのには、このほうがずっと楽だ。女性が履くヒールの高い靴がずいぶん不自然な形のもので、かなり無理な動きを強いられているとあらためて思う。
　通りを歩いている男性の動きに注目すると、人によりさまざまな癖があっておもしろい。そんなことを考えているうちに、一人の少年に目を引かれた。制服らしい濃紺のブレザーと明るめのグレーのパンツを身に着けた二人連れの一人だ。高校生だろう。その少年の歩き方に個性を感じた。
　少年は猫背気味に肩を少し揺らしながら歩いて行く。大股に足を踏み出し、退いたもう一方の足をこころもち引きずり、ノッシノッシとリズミカルに進んでいく。足が不自由な感じではない。アニメに出てくる巨人を連想させる歩行だ。

不自然と言えなくもないが、これまでにも同様な歩き方をする若い男性や少年を何人も見たことがある。そのたびに、どこか格好をつけたようなわざとらしさを感じて不快感を覚えたものだった。近づいて来る少年にはそうした違和感がない。

その少年に引かれた理由がもう一つある。死んだ光太に似ている。子どもっぽさを残した下ぶくれの顔がかわいい。わたしは、目の前を通り過ぎて行った少年の歩き方を真似てみたくなった。

自分がその歩き方で進むさまを頭の中で何度か描き、イメージをどうにか実行に移せると感じられたところで、花屋の軒先を離れた。ゆっくりと足を踏み出してみる。

かつて浮き輪なしで泳ぎ始めたときや、レールに添えていた手を初めて離してスケートリンクの氷の上を滑りだした瞬間と似た、胸のときめきと不安がよみがえる。違和感が、新しい習慣や身に付けたばかりのスキルへと変わる境目のきわどさとでも言おうか。足と肩の動きに気を取られて、思うように前に進めない。全身の皮膚が汗ばむ。

いったん人の流れに加わると、周りの誰もが早足に感じられる。ほかの人たちの歩行の邪魔にならないように気を付けながら、あの少年の歩き方を真似るのに必死になる。道に迷った。でも、かまわない。

今夜も岸川詩乃の部屋に泊めてもらうことになっているが、夕食を一緒に食べる約束はしていない。理系の学科に在籍している詩乃は、勉強ばかりしている。朝から晩まで研究室にいる日も珍しくないとか言っていた。明日が期限のレポートがあるとか聞いた気もする。文学科のわたしとは大違いだ。これ以上、詩乃の邪魔をしたくない。明日は、ホテルに移ろうと思う。

とにかく、きょうはこれから別に予定はない。行き先を決めず、歩いてみよう。これだけ人がいるんだ。暗くて狭い道にさえ入らなければ、安全だろう。それにしても、お腹が空いてきた。こういう場合、男の人だったら、ファーストフードの店ではなく、定食屋や牛丼屋やラーメン屋みたいな店で食事をするのだろうか。その種の店に一人で入るだけの心の準備はまだできていない。何でもいいから、お腹に入れたい。そして歩いてみたい。

慣れない歩き方をしているためか、つい目が下に行き、前を行く人の足を追うような形になってしまう。何度か人とぶつかりそうになる。やっぱり変に見えるのだろうか。目を上げて周りを見たが、こっちに注目している人などいない。

自分がこんなに変わったのに、誰も気に留めないのが不思議だ。まるで透明人間になったような気分がする。そう言えば、高校二年生だった冬休みに、初めて本格的なお化粧をして外出したときも、これと似たような気分だった記憶がある。変わったのに、誰もこちらを見てくれない。

そうかあ、お化粧っていうのは「女に生まれついた人間」が「普通未満」から「普通の女」に化けることなんだ。ようやく「普通」になったから、じろじろ見られないんだ。

確か、そんなふうに大発見をしたつもりになり、一人で納得したことが思い出される。実際には、「化けた」女性たちが密かに同性の「化け振り」に視線を投げているのを知るまでには、それほど長い時間は要しなかったが。

美容室に入る前までは、街の雑踏を歩くと、始終同性の目が気になった。「普通」へと化ける術を身に付けた女性たちは、何げない振りを装いながら、常に周りの同性の容姿、格好、身に着けているもの、化粧の仕方を観察する。その目は本質的に自分に偏っていて意地悪く残酷だ。

一方で、男性に対しては違ったまなざしを向ける。しょせん異性に対しての視線だから、辛らつな見方をすることはない。確かに目は、快不快の分け隔てはするが、女性同士の場合のように目と目が密かに戦いを演じることはない。

女対女の視線のぶつかり合いから逃れたことは、解放だと思った。すがすがしい。男同士って、何てさっぱりしているのだろう。わたしはこの発見を喜ぶ。周りの男性たちがみんな自分の仲間のような気がする。そんな幸福感に浸っていると、その喜びをぶち壊しにするような不穏な気配が目の前に迫ってくるのを感じた。

正面から十七、八歳くらいに見える三人連れの少年たちがやって来る。柄の悪そうな雰囲気を漂わせている。わたしは緊張した。こういう場合には、下を向いたほうがいいのだろうか。真正面を向いたまま、相手を空気のように無視して歩き続ければいいのか。

正面からぶつかるのを避けるために、わたしは無意識のうちに徐々に車道側に身を寄せながら進んでいた。それにもかかわらず、左端にいた背の低い少年と目が合ってしまった。その少年はほかの二人と話していたのを急に止め、こっちをにらんでくる。

危険を感じたが、戸惑いのほうが先に立って視線をそらすことができず、わたしは相手の顔をぼう然と見つめていた。相手の目は鋭さを増し、挑むような表情になった。その体がこちらに寄って来る。予期しなかった目の前の不穏な光景が、テレビドラマの一場面のように思えた。

わたしはようやく状況を理解して目をそらし、素早く斜めに身をかわした。歩道と車道を隔てるガードレールに手をつく格好になり、かろうじてその少年の体に触れずに済んだ。すれ違いざま、少年たちが立ち止まるのが視界の端に見えた。

「なんだよ、おまえ。おれに用でもあんのか？　　ガンつけやがって」

そんな声が聞こえる。わたしは聞こえない振りをして、ガードレールから手を離す。屈んだ体勢を立て直して、そのまま歩き出す。

「待てよ」

「行こ、行こ。ほっとけ」

背後の声に聞き耳を立てながらも、わたしは進む。少年たちに取り囲まれたり、路地にでも連れ込まれそうになった場合には、悲鳴を上げるつもりでいた。もちろん、その時には女の声で叫んで助けを求める。女に戻るしかない。情けないが、そうする以外に選択肢はない。迷うことはない。危険を回避できるのなら、女に戻ればいいのだ。

幸い、少年たちは追って来なかった。

人込みや電車の中で、男性のいやらしそうな粘っこい視線を感じたことは、これまで数知れずあった。だが、見ず知らずの男性から挑戦的な恐ろしい目付きでにらまれたことは、これが初めてだった。

　いつの間にか、普段の歩き方に戻っているのに気付いた。
『外へ出たら、完璧に男の子と間違えられますよ』
『悔いはありません』
　美容室を出る直前に交わした会話の意味を考える。あの時のはしゃいだ気分はもうない。花屋の前で見かけた、弟に似た少年の歩き方を思い出す。わたしは負けない。あの歩き方に戻ろう。
　首をやや前に倒し猫背気味にする。大股に足を踏み出し、もう片方の足を引きずるようにしてノッシノッシ。そうそう、この要領。ぎこちないとリズミカルの中間くらいの感じでノッシノッシ。すると、こころもち肩が揺らぐ。
　もう大丈夫だ。お腹がすいた。二軒先に、ガラス張りの外装の牛丼屋が見える。牛丼屋に入るのは初めてだ。背に腹はかえられない。まずは、腹ごしらえといくか。ノッシノッシ。だいだい色っぽい光を放つ、ガラス張りの店に向かって進む。

第 7 話　視線

＊

亡くなった弟の部屋の片付けと掃除が、ようやく終わった。段ボール箱は五箱しか使わなかった。入っているのは衣類ばかりだ。弟が身に着けていたものは、他人の手に触れさせたくない。

あとは引っ越し業者の「お任せパック」に文字通りお任せすることにした。とは言っても、あと部屋に残ったものは少ない。ベッド、掛け布団、敷きパッド、毛布、デスクとチェアー、テレビ、棚、冷蔵庫、カーテン、靴類。

予備校の分厚いテキストや問題集が二十冊以上ある。どれもが新品同様でページが折られた形跡がほとんどなく、数あるノートも最初の一、二ページしか使われていないのにはあきれた。上京の目的が、予備校に通うためでなかったことは明らかだ。でも、腹は立たない。むしろほおが緩んでくる。

最初、引っ越しは上京した日の翌日に決めてあった。気が変わり、結局は延期してよかったと思う。引っ越し日はきょうから五日後で、まだ時間的に余裕がある。昨日、わたしは西新宿にあるホテルに部屋の予約を入れた。きょうからはホテル住まいになる。

掃除を終えた午前に、名古屋の実家に電話をすると、母の姉である光枝おばさんが出た。

母はどうしているかと尋ねると、友人たちとデパートに行っていて、きょうは遅く帰ると言っていたという意外な言葉が返ってきた。きのう電話をしたさいには、ずいぶん気が沈んでいた様子だった。

「伯母さんから見て、母の状態はどう見える？」

「光太のことを全然口にしなくなったの。それが気掛かりと言えば、気掛かりね。でも、だいぶ落ち着いてきたことは確か。感情に波があるけど、一人にしておいても大丈夫だと思う。わたしも、これできょうは帰るつもり」

「ごめんなさい。お母さんを押し付けちゃって」

「あなたがいないことで、あなたに何でも頼る癖が直ったみたい。でも、まだ正常とは言えないところがあるから、なるべく早く帰って来てよ」

上京した日以来、わたしは高校の同級生だった岸川詩乃のアパートに泊まらせてもらっている。理工学部に在籍している詩乃が、長時間研究室で実験などをした後に、部屋に戻ってレポートを書き、英語の専門書とにらめっこしているのには驚いた。理系の学生は、あんなによく勉強するものなのだろうか。感心してしまう。

　きのう、わたしがそれまで長めだった髪型を変えたのを見て、詩乃はかなり驚いたようだった。サイドとバックを借り上げた、ちょっと変わったスタイルは、わたしの携帯電話に弟が死の数日前に送って来た画像に映っているのと同じものだ。弟の部屋にあった美容室のカードを見て予約を入れ、弟を担当している美容師にカットしてもらった。
「亡くなった光太君をしのぶのはいいけど、部屋にあった衣類を身に着けたり、お化粧を落として髪型まで真似るなんて、やりすぎじゃない？」
　上京した日の夜に会ったときもそうだったが、詩乃はわたしの精神状態を気遣ってくれている。あの日は、実際にいろいろやることが重なって、心身ともに相当に参っていたのは確かだ。でも、わたしは落ち着きを取り戻しつつある。詩乃の気遣いが、ややうざったくなってきたのも事実だ。
　わたしには計画がある。その計画を実行するまでは、名古屋に帰ることはできない。詩乃のアパートにいては実行しにくいし、とにかくお節介には嫌気が差してきた。
　それにしても、きのう食べた牛丼はおいしかった。昨夜遅く部屋に戻って来た詩乃との会話が思い出される。
「牛丼屋さんで食事することある？」
「あるわよ。どうして？」
「きょう生まれて初めて牛丼屋さんに入ったの」
「一人で？」
「そう」
「本当に？　勇気あるなあ。わたし、一人だったら、ちょっと抵抗ある。同じ研究室の男子や女子と一緒なら、しょっちゅう利用しているけどね。ああいうお店で一人で食べるのは、何かこう、独身男性の悲哀みたいなものを感じない？」
「確かに一人で食べている男の人を見たら、わびしさみたいなものを感じた。一緒に夕ご飯を食べてくれる恋人がいないの？　とか、お友達はいないの？　なんて尋ねてみたくなったもの」
「でしょ？」
「でも、あの時には自分も半分は男のつもりでいたから、深くは考えなかったけどね。とにかくお腹がすいていたから――。ああいうお店の牛丼がおいしいのにはびっくりした。ツユっていうの？　あのタレに秘訣があるのかなあ。また食べてみたい」
「栄養のバランスが取れないことは確かよ。ファーストフードなんだから」

＊

　午後一時過ぎ。
　西新宿にあるホテルに着いた。荷物は、弟のカバンの中で一番大きなものと、渋谷にある服の店のネームとロゴの入った大き目の紙袋。服は、下着が女物と男物の重ね着になっているくらいで、上下も中も全部弟のものだ。だいたいのものは持って来たが、着替えようと思えば、まだ引っ越しが済んでいない部屋に戻ればいい。
　髪を切って以来、詩乃の前を除いて、服装だけでなく身のこなしや話し方に至るまで、わたしは完全に男性で通している。十月の中旬でよかった。これが夏だったら、乳房が

目立たないような工夫に頭を悩ませなければならない。わたしは痩せ気味で骨ばった体つきだが、アンバランスなほど胸に膨らみがある。

ゆったり目のシャツの上に、ジャケットやジャンパーを着れば上体の特徴はまず隠せる。下半身には問題はなさそうだ。弟のジーンズの中で一番タイトなものでさえ、裾が少し長いくらいで、腰や腿はぴったりと収まる。これは、意外であると同時にうれしい発見だった。

フロントでは、住所は名古屋の家にして弟の名前でチェックインする。フロント係が何げなく探るような職業上の目線を送って来たが、相手が目をそらすまで余裕たっぷりの目でにらみ返してやった。

弟の衣類を身に着けた当初は絶えず緊張していたが、今では他人の目をいちいち気にしない。たとえ誰かの視線を感じるときがあっても、何食わぬ顔をして開き直っていれば自然に見える。そう度胸を据えた。わたしは新しい自分を演じるのを楽しむようになっている。

フロントからカードキーを受け取り、案内を断り、エレベーターで三十階に上がって部屋に入る。指定した通り、窓は東を向いている。目指す街が望めるはずだ。西に傾き始めた午後の太陽が新宿御苑らしき深緑のかたまりを照らしている。東京区分地図から切り取った新宿区だけのページと、窓から見える景色を見比べた。

午後三時半。

「仲通り」という表示が出ている通りを三度往復して、地図だけで見ていた街の地理がようやくつかめた。大きな建物や通り沿いに並ぶ店の位置も目に馴染んできた。

面白そうな店があった。ガラス張りなので最初はコンビニかと思った。よく見ると、店頭に週刊誌や競馬新聞やマンガ雑誌を収めたラックが置かれている。その横に駄菓子やガチャポンのたぐいが並んでいる。その店を中心にして、若い男や中年の男たちが歩道にたたずんでいる。何となく立っている感じだ。

店の真ん前で車道にはみ出して、しゃがみこんでいる少年の二人連れがいた。わたしもつられて足を止めた。十六、七歳というところだろうか。自分では、それくらいの年の少年を演じているつもりでいた。二人は同時にこちらに目を向けたが、すぐにまた車道のほうへと目線を戻した。

わたしは店内に足を踏み入れてみた。男性の裸体の写真を拡大したポスターが何枚か天井からぶら下がっていて驚く。

これだ。ここだ――。

ある程度、予想と覚悟はしていたものの、現物を見るとどきどきする。たくさんのＤＶＤや写真集が売られている。平積みされた商品のケースに貼られた写真は、どれもが肉色と肌色をしている。わたしは当惑を隠そうと努め、静かに深呼吸をした。奥へ進むのは止めて、ゆっくりと外へ出る。

まだ昼間のせいか、人通りは少ない。通りには女気はまったくない。かといって、競馬の馬券売り場付近に漂う、がさつな男臭さもない。歩いているうちに、同じ東京でも、ここはほかの場所とは人の目付きが違うことに気づく。

男性の格好をし始めてから、わたしは男性からの視線を感じなくなった。特に、胸やスカートをはいた足に向けられる、無神経そうな男のぶしつけな視線から解放されたことがうれしい。

それが男性から同性だと見られている証しだと思うと得意でもあった。ところがこの街へ来てみると、やたらに男性がこっちに視線を送って来る。自分が女だということが、ばれたのではないか。初めのうちは、そうした思いが先に立ってうろたえた。今では、それとは逆に、自分が男性として見られているのを感じる。

単に見られているのではない。好奇の目で見られているような気がする。弟の衣服をまとい始めた以前に、二十歳の女として男性の不躾な視線にさらされていたのと似ていなくもない。だが、どこかが違う。本質的に、これまでとはまったく異なった状況に置かれているように思われる。

男が女を見る目。女が男を見る目。もちろん、そうした視線のすべてが、性的な意味を帯びている訳ではない。男が男を見る目。女が女を見る目。その視線が、ライバル意識だけで説明できるものでないことも確かだ。

でも、それは一般論でしかない。この街は違う。

男が男を見る目。男が男を装ったわたしを見る目。通りを歩いている男同士が交わす視線。すれ違いざまに送り合う目線。何かが、どこかが違う。この国の文化と風土の中で、公の路上を舞台にして、こんな濃密な視線のやり取りが当たり前のように行われている場が、ほかにあるだろうか。

携帯電話で時刻を見ると、この街に入ってから三十分以上経っている。その間に感じた、何人もの男たちからの視線。わたしは自信に似たものに満たされた。わたしは男に男として見られている。勘違いでなければ、たぶんそうだ。いや、きっとそうだ。そうであってほしい。わたしは、そのためにここに来たのだ。妄想、ナルシズム、勘違い、ひとり相撲。たとえ、そうであってもかまわない。

いったん覚悟を決めると、ずっと気が楽になった。心地よい。わくわくもし、どきどきもする。わたしは自分を弟に置き換えて考えていた。弟にも、こういう視線の飛び交う空間を初めて泳いだ日があったにちがいない。

光太、あなたは何を求めて東京に来たの？　こうした状況と視線を求めていたの？

母とわたしという二人の女が仕切っている家。母の姉や妹、そしてその娘たちが頻繁に出入する、女の濃厚な匂いに満ちた家。光太、もしかして、あなたはそんな家に嫌気がさしていたの？

もう、弟と口をきくことはできない。でも、弟のかつて口にした言葉の断片が、次々と頭の中によみがえってくる。自分が男だと意識し始めたころの弟。かわいい男の子という、他人が自分に対して抱くイメージに戸惑い始めたころの弟。自分に注がれる他人の視線をもてあましていたころの弟。何かにつけ、姉のわたしの真似ばかりをしていたころの幼い弟。

『セックスレスの夫婦がいても構わないよね。友達感覚で仲良く暮らせば、それでいいじゃん。別にセックスなんてしなくてもいいと思う』
『この階の男子トイレに変な男がいて、おしっこさせてくれないんだよ。危ないよ、あいつ。ぼく、店の警備員に知らせてくる』
『マジ版のラブメールもらっちゃったよー、部活の後輩の男子から』
『お姉ちゃん、ぼく、きょう男になっちゃった。お姉ちゃんに初めての生理が来て女になったのには一年遅れたけど、ちゃんと男になった。これ、お母さんには内緒にしておいてね』
『かわいいって言われるの、あんまり好きじゃないなあ。何だか、子ども扱いされているみたい。早く、かっこいいって言われるようになりたい』
『電車の中で痴漢にあっちゃった。女の子と間違えられたのかなあ。それとも、男の子だから触ってきたのかなあ。あんな格好をしていたんだから、絶対に女の子と間違えられるはずないんだけど』
『お母さん、きょうね、幼稚園に来たおねえさんやおばさんたちから教わったよ。お腹にうんと力を入れて、うおーってうなるんだ。そしてね、足のここんところを思いきり蹴るんだ。そうすれば、「ふしんしゃ」が逃げていくんだって』
『これでいいんだよう。しゃがんだほうが、おしっこしやすいんだもん』

　また、あの妙な店の前に来た。さっきより男の数が増えている。そのうちの一人が露骨にわたしと目を合わせて来た。男の格好をする前の自分に注がれたことのある粘っこい男の目が、男の格好と髪型をした自分に注がれている。
　今、自分は、女から男へと化けた自分という曖昧な存在を、これまでの空想ではなく、現実の出来事として体感している。そんな転倒した思いに、わたしは酔っている。初めて味わう不思議な気分だが、これは夢ではない。頭の整理がつかないが、この街では現実なのだ。それだけは言える。

第８話　踏み出す

＊

日が落ち始めている。南北に走る通りを何度往復しただろうか。あの店の前にたたずむ男性たちの中に溶け込み、曖昧でありながら、決して無為ではない時間をどれだけ過ごしたのだろう。

西新宿のホテルにチェックインしたのが午後一時過ぎ。それから、どれを着て行こうかと迷いながら、弟の服をベッドの上に片っ端から並べて、一人でファッションショー。そんなことを一時間以上もした後、ようやく外に出た。

頭の中に刻み込まれている地図を頼りに、徒歩でこの街に着いたのが三時半より少し前くらいだった。携帯電話で時刻を確認する。今は午後五時十三分。いつも外出するさいに使っている女物の腕時計は、もちろん左手首にはない。

そう言えば、弟のタグホイヤーはどうしたのだろう。警察から戻ってきた物の中にも、あとは引っ越しだけになった部屋の中にもなかった。あの凄惨な事故で原形をとどめないほどの状態になり、破棄されてしまったのか。

タグホイヤー――。

あれなら常に身に着けられる良い形見になったのに。

この街に来て二時間ほどになる。途中で若い男に後をつけられているのに気付き、早足で逃げたりもした。生前の弟の隠れた部分を知ろうとしてここに来たものの、具体的にどのような行動をすればいいのか分からない。そもそも、何があるのか、どうなっているのかが分からないのに、計画や予想が立てられる訳がない。でも、これでいいのだと思う。

通りを折れて狭い路地に入るのはやめておいた。比較的広い道との交差点があったので、恐る恐る通りを外れてその道を進むと、小さな公園があった。池まである。その公園に入ろうかと迷っていると、五十歳前後に見える男の人が声を掛けてきた。

「きみ、ちょっと時間ない？」

男に化けて初めての直接的なナンパを経験した。

「おれ、今、ちょっと急いでますんで」

用意していたせりふを低めの声で言った。この格好をし始めてから他人と話すさいに出す声だ。ぼろが出そうになるので、なるべく口を動かさず、お腹に力を入れて小声で言う。ぼそっとつぶやく感じをイメージしている。声を男に似せるのはすごく難しい。

「ドライブに行かないか？」

断ったのになおも話し掛けくるので、早足で通りに戻った。こちらのほうが人けが多い。車もよく通る。あの公園は怖い。公衆トイレの付近にいる若い男たちの目付きが怪しかった。夜になれば、さぞかし不気味な雰囲気になるだろう。

　通りを歩いていると、ここに来たときからずっといる男の人が何人かいるのに気付く。ナンパが目的ならよほど暇なのだろうとも思うし、何か訳ありの仕事でもしているのかとも考えられる。
　お腹が空いた。喉も渇いている。通りに面したコーヒーショップに入ろうか、それともいったんこの街を離れようか。ここまで来た道を逆戻りする形で新宿通りに出て、まっすぐＪＲ新宿駅の方向に進めば、一人でも入れそうなファーストフードの店や牛丼屋がありそうだ。
　きのう生まれて初めて牛丼屋で食事をしてみたが、あれはなかなかおいしかった。注文の仕方も、メニューの内容もだいだいつかめた。あそこと同じチェーンの店なら一人でも入る自信がついた。コーヒーショップはパスして、新宿通りへと向かうことにする。
「行ったり来たりで疲れた？　　一緒に何か飲まない？」
　コーヒーショップを通り過ぎたところで、背後から声がした。歩を緩め、振り向こうとしてゆっくりと体を回す。雑居ビルらしい建物のガラスのドアに反射して、若い男の姿がぼんやりと浮かび上がった。
　突然のなれなれしい話し方に不快感を覚えた。お腹が空いているので、余計にうざったく感じる。『行ったり来たりで――』とか言っていたけど、いつごろから見られていたのだろう。感じが悪い。さっき使った『おれ、今、ちょっと急いでますんで』の代わりに用意してある断りの文句を口にすることにした。
「待ち合わせしてるんで」
　完全には振り返らない体勢のまま、相手の顔を見ないで言う。
「残念だなあ。少しだけでも駄目？　　待ち合わせの時刻は何時？」
　強引な口調だが、よく通るいい声だった。
　既に肩を並べている相手に、ようやく目を向ける。下はジーンズ、上は黄と青と白の混じったチェックのシャツを着ている。上のボタンを外して、薄地で紺のタートルネックのセーターを覗かせている。顔付きは落ち着いていて、二十五、六歳に見える。
　公園沿いの道路で声を掛けてきた中年の男に比べれば、はるかにましな雰囲気を漂わせている。寒そうに見えなくもない格好と、手に何も持っていないところを見ると、近くの駐車場に車を預けているのかもしれない。
　この男とならコーヒーくらいは付き合ってもいい。とにかく椅子に座って喉を潤したい。トイレにも行きたい。
「じゃあ、少しだけなら」
「ありがとう」
　男は軽く頭を下げた。

　男の後についていく形で、通り過ぎたばかりのコーヒーショップに入った。奥のテーブル席に着き、ブレンドを注文してからトイレに立ち、席に戻る。
　腰を据えるとほっとする。長時間、よく歩き回っていたものだと思う。
「この辺にはよく来るの？」
　男が切り出した。隣のテーブルの客たちが気になるのか、小声になっている。
「あんまり」

　初めてだと正直に答えれば、付け込まれる気がする。
「友達と一緒に店に飲みに行ったりはしないの？」
　友達？　店？　いきなり何なの？　と聞き返してやりたくなる。唐突で不躾な質問だが、こういう場所ではこんなふうに、初対面での会話が進んでいくのだろう。そう思うと腹も立たなくなった。
　よく考えると巧妙な探りの入れ方だ。この辺に一緒に来る友達がいて、店に飲みに行くくらい慣れているか、つまり「遊んでいるか」と尋ねているわけだ。
「この辺の店って意味？」
「そう」
「別に」
　話をはぐらかす。こんな場合には敬語を使うべきなのか、友達同士のような口の利き方でいいのか判断に迷いながら、わざとぶっきらぼうに話す。

　男の格好をするようになってから、電車の中やファーストフードの店で、弟やわたしと同じくらいの年齢か、それよりも年下の男の子たちの話し方や話す内容に聞き耳を立てるようになった。服装や仕草にも、ガンをつけていると思われない程度に目をやって観察している。東京の男の子と名古屋の子とでは、やはり言葉と話題がだいぶ違う。
　もちろん一人ひとりの個性はあるが、概してこっちの子のほうがさめていて、他人と距離を置き、冷たい感じがする。それにAと言いたいのにBと言い、それを言われた相手はちゃんとBというメッセージをAとして受け取っている。そんな印象を抱く。名古屋の子だったら、AはAだと言う。偏見かもしれないが、そう思える。
　長く喋る自信はない。女だと相手に悟られない声を出すことだけで精一杯だ。声を低く太く出す練習を一人で何度かしてみたが、他人にどう聞こえるかはまったく見当がつかない。
　三日間アパートに泊めてくれた岸川詩乃が、東京で一番仲の良い、そして信頼できる友達だ。まさか、詩乃を相手に男の声の出し方の練習をする訳にはいかない。詩乃には、わたしの精神状態を案じているというか、危ぶんでいるふしがある。それがうざったい。
「男子トイレにも抵抗なく入れるようになったよ。もちろん、個室を使うけど」
　わたしがこう言ったときの、詩乃の顔が忘れられない。
「香織、それはちょっとやりすぎじゃない？」
「だって、リップクリーム以外にお化粧はしていないし、この髪型と格好よ。女子トイレに入れる？」
「最近は、紛らわしい感じの女性がいることは確かだけど、それでもその人たち、女子トイレを利用しているじゃない。香織、あなた……」
　詩乃は続けて何かを言おうとしたが、口をつぐんだ。『香織、あなたのためを思って言うんだけど、専門医に診てもらったほうがいいんじゃないかな』わたしには、詩乃がそんな言葉を引っ込めた気がした。
　詩乃は真面目でしっかりとしている。優しく情も厚い。もっと服装とか髪型とかメイクにまで気を使えばいいのにと思う。同じ年の女性なのに、男、兄、父親に近いイメー

ジを、ほんの少しだけど抱く。詩乃のそばに寄ると、肩にほおを寄せたくなる衝動を覚えることがある。高校生時代には、短期間だったが、恋愛感情に近いものを覚えたことすらあった。

　目の前の男がいろいろ喋っている。こっちは短く適当に返事をするだけだ。今一つ、何かぴんと来ない男だ。
　男は松長と名乗り、学生だと言って大学名を口にし、吉祥寺に住んでいると自己紹介した。こっちはでたらめの名字を言い、男に聞かれるままに、高田馬場に住んでいる大学一年生で、この辺は初めてではないが、よく知らないと答えた。
「――高校生かと思った」
　お世辞なのだろうが、そう言われるとうれしい。高校生という言葉を聞いて、ふいに頭に浮かんだのは光太だった。自分のイメージの中での弟は、東京の予備校生というより、名古屋の高校生だった。
「しょっちゅう、こんなことをしてるの？」
「こんなことって？」
　男は一瞬見せた、むっとした表情を素早く隠した。
「いきなり、通りで声を掛けてきてさあ」
　こういうときに弟が口にしそうな話し方を想像して、それを真似る。
「しょっちゅう、しているように見える？」
「見えるよ。現に、しているじゃん」
「好きだよ。そういうふうに、はっきりと物を言う人」
「本当のことを言ってるだけ」
「ますます気に入った」
「ご勝手に」
「そうやって、いつもつっぱってるの？」
　相手が反撃してきた。ちょっとやりすぎたかもしれない。でも、負けない。
「それって、声を掛けてきたほうの人がいう言葉？」
　これじゃ喧嘩腰かなと思いつつ、口にしていた。もう完全に、弟、いや自分で作り上げた弟をもとにした架空の男の子のイメージになりきっている。この調子で続けていると、やばいかもしれない。
「ごめん」
「別に謝らなくてもいいですよ」
　内心はどきどきしているが、路上と違って周りに人の目があるために安心し、いくぶん大胆になっている自分を感じる。松長が下手に出ているさまは、女性をくどこうとしている男性の控えめな態度に通じるところがある。そう思うと、松長が隠しているはずの半面が怖い。
　今のシチュエーションは男と男のナンパだ。安易に男女のナンパと結びつけてはならない気もする。何が起こるか分からない。調子に乗ってはだめだ。いずれにせよ、ここは店の中だ。周りに人がいる。いざとなったら、女の声で助けを求める手もある。女に

戻って救いを求めれば、その場を切り抜けることができる。男の格好をするようになって以来、そうした考えが心の奥にあるのを感じる。それが行動の支えになっている。そうでいいのだと思う。

大学はどこかと聞かれたので、岸川詩乃の在学している大学の名を口にした。この間、テニスのサークルの合同練習でそっちのキャンパスに行ったばかりだと言い、大学のある駅の周辺のケーキ屋とレストランの話をし始めた。食べ物の話になると松長は夢中になった。

話はとめどもなく続き、パリの場末にあるジェラートの店でのエピソードまでが出て来た。父親の仕事の都合で、小学校から中学まではパリで暮らしていて、教育は日本人学校で受けたらしい。話題はフランスの家庭料理に移った。お腹は空いているが、食べ物にそこまで執着していない者にとっては苦痛だ。こっちは、いい加減にあいづちを打つ。

そろそろ時間ですから、という決まり文句を口にし自分の分のお金を置いて店を出るタイミングをはかる。こっちが退屈に思っていることをほのめかすためにうつむき、裏返しにされている伝票に目をやる。

「ぼくばかりが、一方的に話してごめん」と言い、松長は話題を変えようとした。

隣のテーブルの客たちが席を立ち、ドアへと向かい始めた。

そろそろ、と言い掛けると、すかさず松長がさえぎった。

「ところで、いつごろから自分が男の人に興味を持っているって意識し始めた？」

露骨な質問だと思う。あなたに関係はないでしょう、と一言残して店を出ようとも考える。でも、これから先、この街でこうした会話のできる男の人に出会える可能性はないかもしれない。このまま別れるのも惜しい気がする。暴力的な人ではないみたいだし、遊んでいそうにも見える。ひょっとして弟のことを知っているかもしれない。

こっちは、光太と同じ髪型をし、同じ服を着ているのだ。光太の兄か弟だと思っていることはないだろうか。そんな小説みたいなことなんてある訳がない。それより、こっちが女だと承知していて、からかわれている可能性のほうが高いかもしれない。

今は敵地に乗り込んだような状況にある。このまま引き下がっては、計画は失敗に終わるだろう。弟のことをもっと知りたい。弟が、この街に来ていた証拠と言えるようなものが部屋にいくつかあった。ＤＶＤ、店の名の入ったブックマッチ、同じ店のネーム入りグラス、この辺りの店の中で撮られたと思われる複数のスナップ写真……。

この街の男の人たちに、自分は本当に男だと見えているのだろうか。生前の弟を知っている人の目に、自分はどう映るのだろうか。自分は弟にどれくらい似ているのだろう。弟の知り合いは、弟についてどう語るのだろう。そうしたことが知りたい。ある程度、納得したところで、名古屋に帰りたい。

「どうしたの？　急に考え込んじゃって……。悪かった。出し抜けにこんな質問をして、ごめん」

「謝る必要はないですよ。ただ、そういう質問をするんだったら、自分のことから話すのが礼儀だと思っただけです」

いやに、しおらしい話し方になってしまった。さっきまでは隣のテーブル席に人がい

て、思うように話せなかったし、ナンパされたという興奮が冷めきらずに気負っていたのかもしれない。
「そうだよね。失礼だったと思う」
　松長は言い、うなずいたとも謝ったとも取れる仕草で下を向き、沈黙している。うつむくのは、考えるときの癖なのかもしれない。
「ぼくの場合には、小さいころから男女両方に興味があったなあ」松長が顔を上げ、口を開いた。
「もちろん、性的な意味と、恋しいとか愛しているとかいう感じ、つまりこの人と一緒にいたいという感情の二つの面があったと思う。今でも基本的には自分の好きなタイプなら、男性でも女性でもどっちでもいい。どちらでもいいというのは、愛せるという意味。男、女って、あんまり区別して考えない。かといって、バイセクシュアルという言葉で自分を縛りたくはないし、その言葉で他人からくくられたくもない。セクシュアリティは個人的で繊細なもので、グループ化とか一般化はできないものだと思う」
　ここで松長は口を閉じた。
「そうなんですか」
　それくらい言葉しか返せない。話だけを聞いていると、ずいぶん年上の人に思える。学生だなんて、嘘なのは確かだ。でも、それはお互い様だ。あっちは若作り、こっちは男作り。「男作り」という言葉が頭に浮かぶと、笑い出しそうになった。
「で、君はどんな人が好き？」
　言葉に詰まる。相手は軽い気持ちで尋ねているのかもしれないが、考えてしまう。この戸惑いは、弟がもうこの世にいないことから来ているように思える。弟は、どんな人が好きだったのだろう。「好きだ」ということをどう考えていたのだろう。
　松長が言った、『性的な意味』、『恋しいとか愛しているとかいう感じ』、つまり『この人と一緒にいたいという感情』という言葉の意味を考える。弟は何を求めていたのだろう。
「分かりません」
「そうだよね。急に聞かれても分からないよね」
　話がかみ合っていない。松長は、こっちがどういう人を好きなのかと尋ねている。こっちは弟がどういう人が好きだったのかを考えている。問題は、こっちが考える対象をつかめていないことにある。わたしは、まだつかめていないものを探しにこの街に来ている。
　自分は、とんでもない間違ったことをしているのではないか。弟をしのぶのでもなく、弔うのでもなく、その心と気持ちをもてあそんで侮辱しているだけなのではないか。
　喉が渇いた。空になったコーヒーカップの横に、水の入ったグラスが置かれている。そのグラスに手を伸ばす。
「細い腕だね」
　松長がつぶやくように言った。
　この人は、気付いている。
　とっさに感じた。もしもそうだとすれば、わたしたちのしている話は、かみ合っていることになる。松長と名乗る男が、男の格好をした女のわたしに興味を持っているのならば……。
　弟のことばかり考えていたところに、いきなり「わたし」が飛び込んで来た。頭が混

乱してくる。わたしの手は、グラスを握ったまま動かない。わたしは、自分の右腕の手首を見つめる。とっさに考えた。弟は、どんな手首をしていたのだろう。

第 9 話　出発点

＊

外は暗くなりかけている。行き先を考えることなく、通りを進む。男たちがたたずむ例の店のほうに向かっているのに気付く。男たちの数は増えている。十代半ばに見える者たちから中年までいるが、どこか年齢不詳な印象を与える人が多い。

後ろから靴音がするので振り向くと、四十歳前後とも五十歳前後とも見える男と目が合った。大柄な男だ。その口元がほころびた。男を無視して向き直り、そのまま進む。男は「ねえ、ねえ、きみ」と言いながら追いつき、わたしと肩を並べた。

恐怖心を覚え、声を上げそうになる。その男とわたしの背後に人が近づく気配がしたので、首だけ回して後ろを見た。さっきまでコーヒーショップで向かい合っていた松長と名乗る男が、斜め後ろにいる。ほっとする。コーヒーショップでの興奮がまだ冷めやらず、足が中に浮いた感じが残っている。

「お小遣いあげるから、一緒に来ないか？」

男はスーツの上着の内ポケットに手を突っ込んでいる。

「一万でどうだ？　　前金で払うから」

札入れを取り出している。

「馬鹿にすんなよ」

立ち止まり、低めの声で言い返す。

「何だい。もっと欲しいのか？　　いくらだ、言ってみろ」

男は声高になった。辺りにまばらにいる男たちの視線が、こちらに集まる。松長も立ち止まり、距離を置いて見ている。

「だから、馬鹿にするなって言ってるんじゃん」

傍らで札入れを手にしている横柄そうな男の顔を見ているうちに、本気で腹を立ててしまった。男にはそれ以上取り合わずに歩き出す。

「何だよ。人を馬鹿呼ばわりして、ただで済まそうっていうのか」

背後で男がすごんでいる。支離滅裂な言い掛かりをつけている。

反射的に駆け出した。男はたちまち背後に迫り、右肩をつかんできた。突然の力にのけ反りそうになる。

背中のすぐ後ろ辺りで、どすっという鈍い音がして、男の手が肩から離れた。振り向くと、松長と男が胸ぐらをつかみ合っている。男のほうが松長より五センチほど背が高い。さっきの音は、松長が男を背後から蹴るか殴った音かもしれない。

二人は、それ以上は争わずに二言三言交わした。頭に血が上り、キーンという激しい耳鳴りを覚えた耳には、何を言っているのかは聞き取れない。

　男が先導して二人は車道を横切り、向かい側の歩道に移った。シャッターを下ろした店の軒下で何やら話し始めている。様子を見ていると、まんざら知らない間柄でもなさそうだ。このまま立ち去ろうとも考えたが、男を引き離してくれた松長のことが気になる。
　薄暗い中で二人は互いにうなずき合っている。いきなり中年の男のほうが声を立てて笑った。最後に二人は軽く手を上げてあいさつし合い、男はちらりとこっちを見たあと新宿通り方面へと去った。

　松長が服装を整えながら車道を渡り、近付いて来た。
「さきほどは、本当に失礼しました。反省しています」と松長は頭を下げた。口調がすっかり変わって敬語になっている。女として扱われていることが身に染みる。「お詫びの言葉を言いたくて、あなたを追って店を出ると、あの人があなたの後を付けていたので――」
「こちらこそ、松長さんにお礼とお詫びをしなければなりません。助けていただいてありがとうございました。それと、さきほどは、あんな唐突な態度をとってしまい失礼しました」
　頭を下げる。
　落ち着いて考えれば、行き違いがあったにすぎない。
　男の格好をした女子学生が、松長という自称男子学生に男子高校生と間違えられてコーヒーショップに誘われた。女子学生は亡くなった弟をイメージして自称男子学生と会話し、自称男子学生は男子高校生をナンパする気でいた。
　話をしているうちに、自称男子学生は男子高校生が若い女だと気付いた。女子学生は自分が女だと相手が見破った後になって、ようやく自分が女だとさとられているのを知った。それを知ったさいに、女子学生であるわたしは精神的に動揺し、混乱に陥った。
　弟と同じような若い男でも、若い男を装い演じている若い女でも、一時的な性的関係、または恋愛の対象として考えることができる男。そんな男が目の前にいるという状況が、わたしにはにわかに理解できなかった。
　整理すれば、そういうことにすぎない。
『ぼくの場合には、小さいころから男女両方に興味があったなあ』
『今でも基本的には自分の好きなタイプなら、男性でも女性でもどっちでも大丈夫。大丈夫ってのは、愛せるという意味。男、女って、あんまり区別して考えない』
『で、君はどんな人が好き？』
　そうした松長の言葉は、誘った相手が男を装っている女だとほぼ確信したうえでの探りと確認のサインだったに違いない。わたしは、そのサインに気付かなかった。
　コーヒーを飲み干したカップの横にあった水の入ったグラスを手に取ろうとしたとき、松長が言った。
『細い腕だね』
　その言葉で、ようやく自分が女だと見破られているのを直感した。何て鈍くて馬鹿だったのだろう。恥ずかしさと戸惑いと混乱のうちに、席を立ち、コーヒーショップからいきなり飛び出していた。さぞかし松長も驚いたことだろう。だから、気になって後

を追ってきたのかもしれない。そして結果的に松長に救われた。

「これくらいの時間になると、一人でこの辺を歩くのは危険です」
　靖国通り方面へと並んで進みながら、松長が言う。
「わたし、疲れました。帰ります」
　正直な気持ちを口にした。
「よろしければ、ぼくのケータイの番号を登録していただけませんか。あなたの番号は聞きません」
　わたしは立ち止まって歩道の脇に寄り、携帯電話をパンツの横ポケットから取り出した。
「木の松と長い短いの長の『松長』です」と言って、番号を口にする。「送って行きましょうか？」
「途中までお願いします」
「駅はＪＲですか？」
「わたし、タクシーのほうが」
　一刻も早くこの街から去りたい。ホテルまで歩くのもつらい。
「タクシーですか？」
「はい」
「そのほうが安全かもしれませんね。で、行き先は？」
「――東京駅」
　思いがけない言葉が出て来て、自分でも驚く。東京駅という言葉を口にしたとたん、このままホテルを引き払って名古屋に帰ろうという考えが頭に浮かんだ。
　目が合った。松長は、不思議そうな顔付きをしている。
「本当に？」
「はい」
　行き掛かり上「はい」と返事をしたまでで、心の中ではまだ東京にとどまることは分かっている。
「そうですか。東京駅なら、靖国通りじゃなくて新宿通りでタクシーを拾ったほうがいいです」
　通りを引き返す。松長は考えるような表情となり、何も言わない。新宿通りとの交差点が見えてきた。荷物を置いてある西新宿のホテルと東京駅とは、方向が逆だと気付く。どうでもいい。タクシーの座席に背をもたせて腰を沈めたい。運転手を無視して、思い切り声を上げて泣いてみたい気もする。
　仲通りへの入り口を過ぎ、新宿通りの歩道に出た。午後三時半より少し前に、ここで仲通りへと足を踏み出した時を思い出す。あのわくわくした気持ちはもうない。自分が男に見えるという自信もどこかに行ってしまった。悔しい。弟とまったく同じ格好と髪型をしているのに。髪をばっさりと切ってから、ずっと男として通してきたのに。
　わたしが女だと見破った松長と並んでいるせいかもしれない。だから、弱気になっているだけだ。単に歩き疲れて、お腹が空いているだけだ。

　牛丼の大盛りが食べたいと、ふと思う。そうすれば元気が出るような気がする。このところ、牛丼にはまっている。

　大通りの喧騒が耳に入る。思えば、ここが出発点だった。
　この出発点に立って新宿通りから仲通りへと折れて、一歩足を踏み出した瞬間が、かつて弟にもあったにちがいない。携帯電話を取り出し、素早く弟の写真を表示させる。自分と同じ髪型をした光太の澄ました顔が、液晶の光の中で輝いている。
「タクシーを拾うなら、もっとこちら側に進みましょう」
　松長は交差点を避け、東へと足を向けた。ちょうど大通りの信号が赤になり、手前の車線の流れが途絶えた。松長と少し離れた位置で、信号が変わるのをじりじりしながら待つ。
　信号が変わった。松長が車道へと近付く。速度を落としたタクシーが手を上げた松長に寄って来る。タクシーが止まる。
「送っていただいて、ありがとうございました」
「お気をつけて。電話、待っています」
　去ろうとしている街のほうに振り返る。通り沿いの店のどれもが照明を落としている。わたしは街灯の前に立った。店の暗いウィンドウに、グレーのジャケットを着てベージュのパンツをはいた自分の姿が映っている。
　タクシーが軽くクラクションを一つ鳴らした。松長に一礼して、タクシーに乗り込む。
「どちらまで」
　運転手が言った。若い男だ。
「近くに牛丼の店、ないですか？」
「はあ？」
　バックミラーの中で、運転手と視線が合った。
「牛丼の店の前で降ろしてください。あっ、そうだ。店は――」
　この数日間、毎日利用している牛丼店チェーンの名を言った。

＊

　翌日――。紀伊國屋書店の新宿本店前。
「ラザーニャ、好きですか？」
　顔を合わせるなり、松長が聞いてきた。
　嫌いではないと答えると、伊勢丹の近くにある地中海料理の店に連れて行かれた。
　注文が終わり、最初に運ばれて来たワインのコルクを、松長は慣れた手つきで抜いた。
「わたしたちって、まわりからはどう見えると思います？」
　乾杯の後に、わたしは尋ねた。
「さあ？　怪しい二人ってところかな」
「はっきり言ってください。男同士？　男と女？」
「もちろん、男同士」

「そうかなあ。わたし、きのうのことで自信をなくしちゃったんです」
「ぼくが声を掛けたときには、ずいぶんつっぱっていたもんね」
「ごめんなさい。失礼な態度を取って」
「全然。あんなもんですよ。ああいう所で、出会った者同士は」
「そんなものかなあ」
「いいですか――」
　松長が声をひそめて言った。
「えっ？　　はい」
　わたしもつられて小声で返事をする。
「ぼくの斜め向かいに非常口があります」
　松長は表情を変えずに、わたしの左後方にちらりと目をやった。わたしは松長の目線をたどって振り向こうとした。
「まともに振り返らないように」松長がささやく。
「その非常口の右にテーブル席があります。端から二番目のテーブルです。椅子の上のカバンでも開ける振りをしてください」
　何げないふうを装って、松長の言う通りにした。十代半ばくらいに見える少年と、三十歳前後の男がテーブルで向かい合っているのが目に入った。
「まさか」
　わたしは驚いた。
「そうじゃないです。考えすぎないでください。二人とも男性同士です」
　松長の勘のいいのには感心する。わたしは自分たちと同じようなカップルだと、とっさに思った。
「ぼくはあの年上の人をよく知っています。男の子のほうも知っています。会えばあいさつし合うほどの仲という意味で」
「あいさつしないんですか？」
「もう、しました」
「えっ？」
「目と目で」
　わたしは吹き出した。
「しかも別々に」
　松長は無表情で付け加えた。
「どうして、別々になんですか？」
「さあ？　　どうしてでしょう？　　そこは考えてみてください」
　意味がよく分からない。わたしが考え込んでいると、松長が助けてくれた。
「今の状況は、二人を前に『やあ、お二人さん、元気ですか？』なんて調子で、あいさつできないってことです」
「面白い。意味深ですね」
「ええ。こういう雰囲気って秘密めいていて、ぼくも好きです。きっとあの二人も、こっちの話をしていますよ」
「何て言って？」

「『あの人たちもそうだよ』『本当ですか？　　よく分かりますね』『年上のほうとは顔見知りだ。なかなかのワルだよ。気をつけな』『そうなんですか』なんて。たぶん、男の子のほうは、ぼくと知り合いなのを隠すだろうな」
　松長は意味ありげに言った。わたしは自分なりに状況を理解した。きっと松長は、あの少年を以前に誘ったことがあるのだろう。そう思うと、横顔しか見えなかった少年をよく見てみたい気になる。嫉妬に似た感情だ。
「松長さんって、『ワル』なんですか？」
「『ワル』の定義にもよりますね」
「……」
「そんなに考え込まないでください。ジョークです。笑ってください」
　わたしは無理に笑みを作った。
「わたし、本当に男の子に見えるでしょうか」
「見えます。これはジョークじゃなくて、マジに」
「でも、きのう、あの時にどうしてわたしが女だと分かったんですか」
「最初は分かりませんでした」
　信じられない。松長は気を使っている。わたしが女だと最初から分かっていたに違いない。ホテルに戻ったあと、昨夜はあまり眠ることができなかった。松長との出会いとコーヒーショップでの会話を、ベッドの中で何度も思い返していた。だまされた振りをしておこう。
「じゃあ、どの辺から？」
「ぼくに気がないと分かった辺りから」
「すごい自信家なんですね」
　わたしは失礼に響かないように笑みを浮かべて言った。
「いや、今のは冗談です。本当は、あなたがつっぱっているのを見ているうちに、どこか不自然なものを感じ始めて、そのうちに――」
「こいつは女だなって分かったとか？」
「ええ。『こいつ』なんて思いませんでしたけど」
「松長さん、一つ聞いてもいいですか？」
「その質問を当ててみましょうか？」
「分かるんですか？」
「分かりますよ。ワルだから」
「じゃあ、質問は口に出しませんから、答えてみてください」
「大学生だというのは嘘。四捨五入して三十歳」
　わたしは吹き出してしまった。二十五から三十四ということになる。こっちの質問を当てるなんて、やはり勘のいい男だ。それとも、同じようなシチュエーションを何度も経験してきたから分かっただけか。
「ね、やっぱりワルでしょ？」
　ワルでもいい。きのうはこの年齢不詳のワルにだまされて、いろいろ真剣に悩んでしまった。それは悔しい。でも構わない。わたしは、自分にとって都合のいい相手とめぐり会えたようだ。このワルを利用してやろう。

　今夜、あの街の店に連れて行ってもらうのが楽しみでならない。きょうがわたしにとって、出発点になるかもしれない。

第 10 話　隔たり

＊

　サラダが来た。松長は真っ先にオリーブをフォークで刺して口に運んだ。最後に食べようか、それとも結局は残そうかと、わたしが考えていたものだ。松長はオリーブをかみ終えてから言った。
「おいしいオリーブを食べさせてくれる店は少ないんだ。ここのは合格です」
「わたしのも召し上がりますか」
「オリーブはお好きじゃありませんか？　　確かに日本では、割とましな地中海料理の店でも、オリーブだけはろくなものを出しませんから――。この店はこじんまりしていますが、ぼくは以前から気に入っているんです。試してごらんなさい」
　松長と会話していると、ますます相手の年齢が分からなくなってくる。昨日あの街でわたしに声を掛けてきてコーヒーショップに誘い、自分は学生だなんて嘘をついた一方で、わたしが男の格好をしていることを見破った男。
　教えてもらった携帯電話の番号に、わたしは昨夜のうちに電話を掛けてしまった。もちろん、名古屋に帰ろうなどという気持ちは、一時的な思いつきにすぎなかった。
　本当かどうかは分からないが、小学校と中学校での教育をパリの日本人学校で受けたという男。こうやって明るい所で向かい合っていると、容姿は大学三、四年生に見える。話していると三十歳くらいにも感じられる。一緒にいて心が休まるのは、なぜだろう。
　声だろうか？　　最初に声を掛けられたとき、その声の響きに引かれたのは確かだ。亡くなった弟を演じていたあの時のわたしは、弟としてこの男性に興味を持ったのだろうか、それとも女のわたしとして引かれたのだろうか。
　テーブル越しに、松長が不思議そうな顔をしている。そうだ、オリーブの話をしていたのだった。
「やっぱり遠慮しておきます。オリーブは苦手なんです」
「では、遠慮なく」
　フォークを持った松長の手が伸びてくる。わたしの皿のオリーブをフォークが突き刺す。濡れたオリーブが尖った金属に貫かれた瞬間、どきりとする。性的なイメージが脳裏をよぎる。
　ラザーニャが運ばれてきた。確かにおいしい。
　もっぱら松長が話し、わたしは相づちを打つ。松長の声が旋律のように耳を撫でる。ワインのせいか、心地よい酔いが全身を包む。話の内容など、どうでもよくなってくる。拍子をとるように、わたしはうなずき、ときおり首を傾げる。
　男と、男を装ったわたし。男と、男の子。夜が近づくにつれて、男や男の子たちが集まる街。

「――そう思わない？」松長が言って、返事を待っている。
　何を尋ねられたのか分からない。わたしは、あいまいに首をひねる。松長はほほ笑み、話を続ける。

　きょうは、これからどうなるんだろう。これから連れて行ってもらうあの街のことで、わたしの頭の中はいっぱいだ。
　きのう、松長に声を掛けられるまで何度も往復した、南北に走る「仲通り」を思い出す。公道で昼間から堂々と、男と男が意味ありげな視線を交わしている街。生前の弟が歩いていたに違いない、通りと幾筋もの路地。仲通りと交差するやや幅の広い道を進もうとして見つけた、池のある小さな公園。
　あの街は夜にはどんな顔を見せるのだろう。どんなドラマやアクシデントが起きているのか。昼間には単なるプラスチックの板にしか見えなかった数々の店の看板は、夜にはどんな光を放っているのだろう。男たちの視線は、太陽が空にあるうちとは違ったものへと変化するのだろうか。
　あの視線の中を、もう一度泳いでみたい。このワルと一緒なら安心だ。利用してやろう。
「何か考え事でも？」
「ごめんなさい。わたしって、ぼんやりして見える質なんです」
「そうかなあ。きのう、一緒にコーヒーを飲んでいたときには、ずいぶんつっぱっていたけど」
　わたしたちは同時に笑った。
「くどいかもしれませんが、わたし、本当に男に見えますか」
「そんなこと心配していたんですか？　　見えます。嘘でもお世辞でもありません。ぼくは一度自分を振った人には、お世辞は言いません」
　そう言って、松長はグラスのワインを飲み干した。
「振っただなんて」
「それは事実です。とにかく、あなたが女性だなんて、その世界の人にも普通の人にも絶対に分かりませんよ。この『ワル』が保証します。特に、ぼくは中性的な若い男性や女性に人一倍関心がありますから、自信はあるんです。そのぼくが、最初のうちは見破れなかったんですから」
「嘘ばっかり」
「本当です。そんなにぼくが嘘つきに見えますか」
「はい。巧妙な嘘をつける人に見えます。ワルですもの」
「はっきり言ってもらって、ありがとう」
　わたしたちは笑みを交わした。
「ワルが一緒だと心強いです」
「ワル、ワルって、あまり言わないでくださいよ。事実だから余計、胸にぐさりと来るんです」
　笑顔を崩さず松長が言った。

＊

この街に再び来た。夜には、がらりと印象を変えている。ビルの壁に縦に連なった、バーやスナックやクラブの看板の光が放つさまざまな色。今夜は空気が湿っているせいか、狭い路地から吹き抜けてくる風が湿っぽく、かび臭い。

人の流れを観察すると、やはり女性の姿は極端に少ない。ただ、昼間には見掛けなかった二、三人連れ、または五、六人の明らかに女性らしき集団を時々目にする。ごく普通の主婦やＯＬといった雰囲気の人たちだ。いやに、はしゃいでいる。松長の話では、この街には、主に女性客を対象にショーを見せる店もあるらしい。そうした店に行く途中なのか。

一見しただけでは、男女の区別が容易につかない人もいる。そういう人は、たいてい一人で歩いている。どこか謎めいていて、後をつけてみたい衝動を覚える。

「仲通り」の歩道が狭いため、松長と肩を並べたり前後になりながら歩く。道行く男たちの中には視線を送って来る者もいる。わたしは、どう見られているのだろう。レストランで松長が言ったように、本当に男に見えるのだろうか。

この街が、男に興味を持つ男たちの視線であふれていることは確かだ。今回の上京で歩いた、夜のほかの街とは、雰囲気が違う。ほかの街は、無関心な目であふれていた。ここは違う。

松長は、通行人とあいさつや目礼や短い言葉を頻繁に交わす。その相手は、二つに大別できる。わたしの目から見てもかわいい感じのお洒落な男の子たちと、松長と年の近そうな人たちだ。

「ほら、またあいつがいる」

通りに面した、ひときわ明るい照明を放つガラス張りの店に、松長が視線を投げる。一見雑貨屋、奥に入るとポルノショップ。きのうの昼間に足を踏み入れかけて、慌てて出た店だ。

店の真ん前の電柱の横に、あの男がいる。

きのうの夕方に、わたしの後をつけて来て、いきなり『お小遣いあげるから、一緒に来ないか？』と言った男だ。

松長に誘われて入ったコーヒーショップで、自分が女であることを松長に見破られてショックを受け、当惑と混乱のうちに外へ飛び出した直後のことだった。わたしを追って来た松長と男とは取っ組み合いの喧嘩になりかけたが、大事には至らず、わたしは松長に救われた形になった。

「あの人とは知り合いなんですか」

きのうの感じでは、松長とあの男とは初対面ではない感じがしたので、わたしは尋ねた。

「単なる顔見知りだよ。でも、君があんな目に遭っていたから、初めて口を利いたんだ。誰もこんな場所で面倒は起したくない。喧嘩にでもなれば、近くに交番があるから、警

察官が飛んで来ることもある。それにまともなやつなら、体面を気にするよ。すぐに仲直りしたさ」
「そんなもの？」
「そう、そんなもの」
　この街に入って、松長の話し方がくだけてきたのに気付く。昨日、声を掛けられたときには『君』と呼ばれていた。女だとばれてからは『あなた』と呼ばれ敬語に変わった。さっき食事をしていた間も『あなた』と呼ばれ、お互いに丁寧な言葉遣いをし合っていた。
　それが今では、友達同士か年の近い恋人同士のような話し方になりかけている。自分が、男または男の子として扱われているような気がしてうれしい。
「実際、この辺りに何年も来ていれば、顔だけ知っているやつが増える。と言うか、数日間でもいいから、通ってみると分かるけど、来れば必ず顔を合わせるやつらがいる」
「あの人たち、何をしているの？」
　わたしは、あの奇妙な店に目を向けて言った。
　あの店が、通りの中心点になっているようだ。店を取り巻くように、散らばって男たちがたたずんでいる。昼間の三倍は人がいるだろうか。車道にも人が立ったり、若い子はしゃがみこんでいるため、車が徐行していく。
「相手を探しているのに決まっているじゃない」
「相手――」
「そう、一夜、いやもっと短い時間を共にする相手。場合によっては、それがもっと長くなる可能性もないわけではない。ただ、短いのが普通。終わって、バイバイ。また会っても知らんぷりが、ほとんど。一度関係があったあと、せいぜい知り合いか友達同士になるなら、いいほうかな」
「ふーん。そうなんだ」
　ついていけない。悲しすぎる。そんな関係なんて、人間同士の関係と言えるのだろうか。わたしは自分と、松長も含めた周りにいる人たちとの間に隔たりを感じた。男女の違いなのか。男と女とでは、求めるものが違うのだろうか。これは、わたしだけの個人的な物の見方なのか。男女の差を超えて同じ人間なのに、異質なものを感じる。
「『行きずり』ってことかな」
　わたしは最近読んだ小説の中に出て来た言葉を口にした。
「行きずり？　　古い響きの言葉だなあ。そうも言えるね」
　わたしたちは、その店の前で自然と足を止めた。車道と歩道の境の縁石に足を乗せ、通りに沿って並ぶ格好になった。目の前の車道をタクシーが徐行していく。
　わたしはあらためて、周りの男たちに目をやった。
　共通点はただ男というだけ。年齢はよく分からないが統一感がなく、ばらばらに見える。正面にある店の内部の照明は明るい。店内の狭い通路に立つ男たちが、ＤＶＤや写真集や雑誌を物色している。
　そのさまは、満員電車の中で沈黙し、ひしめき合っている乗客たちにも似ている。ＤＶＤのケースの写真に目をやりながら、手と手が触れ合っている二人を見つけた。二人連れには見えない。どこかが不自然だ。店内で目線を交し合っているらしい者たちも目

につく。

　車道を挟んだ電柱の脇にいる、きのうわたしに声を掛けてきた男が、周囲を見回している。男がわたしたちに気付いた。わたしは緊張する。松長が手を上げて男に会釈する。男がうなずく。

「平和主義で行かなきゃ」

　松長がつぶやき、ジャケットの内ポケットから携帯電話を取り出した。メールが届いたらしい。わたしは松長に尋ねようと思っていたことを思い出し、携帯電話を戻したタイミングを見はからって口を開いた。

「男の人同士用のケータイの出会い系サイトとか掲示板とかもあるとか」

「もちろんあるさ」

「松長さんも利用するの？」

「たまに覗く程度かな。でも、ぼくは直接こういう場所で出会うほうが好きだ」

「どうして？」

「掘り出し物が見つかる可能性が高いから」

「へーえ、そんなもの」

「それにネットでの出会いは、時間が掛かって面倒くさい」

「ふーん」

「昼間の早い時間で暇なときに、この辺に来る。日が沈むころには帰る。そんな感じかな」

「夜遊びをしない子を狙うワル」

「また胸にぐさりと来た」と言って、松長は縁石を蹴るような仕草をした。「最近では、こういう場所には来なくて、ケータイやパソコンのサイトだけ利用している人たちが増えているみたいだね。ぼくは、そういうやり方は苦手だけど」

　それを聞いて、わたしは弟の死について考えないわけにはいかなかった。弟は、ケータイを通じて初めて知り合った男性の運転する車の助手席で死んだ。猛スピードでガードレールに追突し、即死したという。わたしは話題を変えることにした。努めて明るい声を出して尋ねる。

「『ディスタンス』ってお店知ってる？」

　今夜、松長とこの街に来た目的は、その店に入ってみることだ。

「知ってるけど、なぜ？」

　弟の部屋には、『ディスタンス』という名とこの地域の局番で始まる電話番号の入った、しゃれたデザインのブックマッチが五、六個あった。おそらく盗んできたものだろう、店のネーム入りのトールグラスも二個あった。

「連れてってくれる？」

「もちろん。こんな所で立っているんじゃなくて、どこかの店に入るつもりで来たんだから――」

　食事中に、男の格好をしている理由を聞かれたが、『ここでは話にくいから、あとでお答えします』と言って返事を避けた。昨夜、松長に電話したときにも同じ質問をされた。電話でなら話してもいいかと迷ったが、『明日話します』と約束しておいたのだった。

　今なら、弟のことを話せると思う。一癖ありそうな人だから、ひょっとして生前の光太を知っていて、とぼけているのかもしれない。弟の死、そして車を運転していた人の

死は、この世界の人たちの間ですぐに広まったらしい。
　弟の携帯電話に登録されている番号の人に電話したさいに、そう言われた。微妙な話題だから、松長はこっちから話すのを待っているとも考えられる。
「ヒカルって、若い子知らない？」
「どのヒカルだろう。この辺に来る子によくある名前だね。あだ名が多いと思うけど。ヒカルねえ。ヒカルなら十一人知ってるよ」
「本当？」
「うそ」
　ふざけている。わたしは、松長に光太のことを打ち明けるのはやめようと思い直した。「名前は知らないんだけど」と言って、松長はわたしの目を覗きこんだ。「この辺で見掛けた若い子に君がよく似ているという気は、最初からしていた」
「知らないんだったら、いいんです。大したことじゃないから」
　興味をそそる話だったが、弟のあだ名のことで冗談を言われたわたしは半分ヤケになって言った。
「歩こう」
　松長は急に真剣な顔付きになって歩き出した。わたしは慌てて後を追った。

　男たちが立っているあの店の前から離れ、人の通りがまばらになったところで松長は言った。
「あの子のことは知っていた。と言うか、顔は何度も見たことがある。ただ、名前は知らなかったし、口を利いたこともない。好みだったけどね」
　松長が言いよどんでいる訳は分かった。
「遊んでいる子だった。だから、興味はなかった。そういうことでしょ？」
　松長はゆっくりうなずいた。
「きのう、あの店で一緒にコーヒーを飲みながら、君を見ていてあの子のことを思い出したとき、実はぼく自身も混乱してしまった」
　わたしたちは仲通りから小さな公園へと続く道へと折れた。折れた瞬間、人けが途絶える。仲通りと打って変わった寂しい道だ。わたしたちは目を合わせず、肩を並べながら歩道の真ん中を進んだ。
「君とよく似た男の子が亡くなったという話は聞いていた。それだけじゃない。運転していたやつとは口を利く仲だった。だから、きのう君が女性だと確信したとき、ぼくは考えた。目の前にいる人は誰なんだろう？　　それを知りたいと思った。亡くなった少年の姉か妹ではないかという気もした。でも、それでは話が出来すぎている。まるで小説みたいじゃないか」
「松長さん？」
「何？」
「ごめんなさい。わたし、嘘をついていました」
　わたしは初めて自分の氏名と弟の名を松長に教え、自分が光太の姉で、警察が預かっていた弟の物を受け取りに上京し、住んでいた部屋の引っ越しの手配をしたことを告げた。
「事情は分かったけど」と言って、松長は言葉に詰まった。

「でも、どうして弟と同じ格好をして、こんな所にいるかと言うんでしょ？」
「そう。どうして？」
　わたしは考えながら説明を試みた。今自分の取っている行動を言葉にして他人に伝えるのは、これが初めてだ。
　考えていることを、そのまま口にしてみた。
　弟と同じ髪型にし、弟の衣服を身に着けてこの街に来た理由は、正直言って自分でもよくは分からない。
　自分が知り得なかった弟の側面と、どんな生き方をしていたのかを知りたいからかもしれない。
　一方で、なぜ自分がこれほどまでに弟に同化しようとしているかを知るために、東京での滞在を延ばしこの街に来たとも言えるような気がする。
　亡くなった弟を知るためなのか、自分を知るためなのか。
　わたしが言いよどむたびに、松長は「うん、それで？」と、うなずいて話をうながしてくれる。
　高校時代の同級生で東京の大学に通っている親友が、わたしのことを気遣い、精神状態を危ぶんでいるようだ。
　弟の死後、母とわたしは心療内科で処方された「気分を落ち着ける」という薬を飲んでいる。
　心の奥では、自分の精神が病んでいるような気もしない訳ではない。
　そんなことまで口にしていた。
「君は、家族の一員、それも自分に最も近い人を失ったんだ。それで負った心の傷が深くて大きいのは当然だと思う」と傍らにいる松長は静かな口調で言い、話題を変えるかのように公園のほうを向いた。「見てごらん」
　松長が歩を緩めた。わたしも公園内に目をやった。距離を置いて、ぽつぽつとたたずんでいる男たちがいる。園内の街灯の明かりだけでは、はっきりとは見えないが、十代から中年くらいまでの男たちがいる。
「全員じゃないけど、ここには体を売っている者たちもいる。夜は近付いちゃだめだ」
「ばらばら」
　わたしはつぶやいた。
「えっ？」
　松長がわたしのほうを向いた。
「みんな、ばらばら。同じように見えても、同じ場所に集まっても、ネットの掲示板やサイトでつながったとしても、同じ言葉で呼ばれていても、みんなばらばら。ひとりっきり」
　歩道の街路灯の下を通り過ぎた辺りで、松長が一歩前に進み出て、正面からわたしを引き寄せた。わたしは松長の胸に上体だけを預けた格好になり、よろけた。松長が足を踏み出して、わたしの体を受け止める。
「『ディスタンス』に行くんじゃなかったっけ？　あそこへ行けば、君の仲間に会えるじゃないか。さあ、元気を出して。ね、光太君」
　松長の低く優しい声が耳元で響く。昨日、出会ったとき、わたしはこの声に引かれた。

この人は弟の名で呼んでくれた。わたしの、いや、ぼくの夢に付き合ってくれる人がここにいる。一瞬、気が遠くなりそうになり、足元がふらついた。うつむいた目に映る、歩道に伸びた二つの影が重なっていく。

第 11 話　符合

＊

わざと錆付かせたらしい洒落た鉄のドアを松長が引くと、音楽と幾重にも重なった声が耳に飛び込んで来た。松長の後から店内に入ると、煙草のけむりと人いきれの混じった粘り気を帯びた空気が顔をなでる。細長く奥に伸びた内部からたくさんの視線がいっせいにこちらに向けられている気がする。

静かな路地からいきなり騒々しい場所に入ったために、自分がかなり動揺しているのを感じる。きょろきょろしそうになるのを抑え、フロントでメニューを見ながら、松長にリードされて飲み物を注文する。

注文が終わると、松長はわたしを前にして斜め後ろから肩に軽く手を置き、あちこちにいる知り合いの客に会釈したり声を掛けながら、店内をどんどん奥へと進んで行く。

右はカウンター席、左は間隔を空けて細長いテーブルだけが据えられ、その上に飲み物や灰皿が置かれている。どの席も、どのテーブルも埋まっているように見える。

いったいこれだけの数の男がどこから集まって来たのだろう？　仲通りに面した奇妙な店の前に立っていた男たちとは、少し違った雰囲気の客が多い気もする。不安と期待と疑問でのぼせそうになったわたしは、恐ろしく深い洞くつに入っていくような錯覚に陥った。

途中で松長が年齢不詳の短い髪をした人に呼び止められ、わたしたちはいったん立ち止まった。二人は英語で話しているが、速すぎて聞き取れない。二人とも英国風の発音で話している。わたしは大学で英語だけで行われる授業を取っているが、それを受け持っている男性教師の神経質そうに響く話し方を思い出した。

店内が暑いのか、わたしが興奮しているからなのか、額に浮かんだ汗が玉になってくるのが分かる。客全員が男。それもさまざまなシーンで今流行している服を身に着けた若者が目立つ。

英語でのやり取りを済ませた松長の手が、再び肩に触れる。わたしたちはさらに奥へと視線の中を泳いで行った。

一番奥のカウンターに腰掛けていた少年たちが松長を見て、わたしたちに席を譲り、向かい側のテーブルだけのスペースへと飲み物を手にして移動していく。

「悪いね」

「お年寄りは大切にしなきゃ」

「いい心がけだ。五年後に、誰かに恩返ししてもらえるよ」

「五年後？　十年後の間違いでしょう」

松長とそんな会話を交わした十代後半に見える少年が、わたしの体に上から下へと視線を走らせる。わたしも負けずに横目でにらみ返す。

　わたしたちは譲られた席に腰掛けた。カバンは、ほかの客たちに習い、テーブルの下に設けられた出っ張りに突っ込む。注文したドリンクが来た。グラスをくっつけて乾杯したころには、わたしもようやく落ち着き、店の造りの細部を観察する余裕ができた。

　細長い店の内部は実際にはそれほど広くはない。長い洞くつを通ってきたような気がしたが、フロントからの距離も思ったほど長くはなかった。壁の所々に張られた大型の鏡が、広い錯覚を与えている。間接照明を使った柔らかな明るさの中で、天井に設置されているらしいブラックライトに照らされた客たちの衣服の白い部分と笑ったさいに覗く歯が蛍光を放つ。音楽は洋楽ばかりだ。
　わたしは目の前にあるジントニックの入ったグラスと、テーブルの上に置かれた灰皿やブックマッチに入っている文字に目をやる。デザイン化された文字で「DISTANCE」とある。ディスタンス、距離、隔たりと言葉が頭に浮かぶ。
　隣の松長がわたしの目線に気付いたのか、ブックマッチを手に取った。
「ばらばら」
「えっ？」
「公園のそばで、君は言った。人は言葉や場所やネットでつながっているように見えるけど『みんなばらばら、ひとりっきり』だって」
「ええ、そう思う」
「ここも、そう？」
　わたしは、肩越しにフロントのほうに目をやり、店内を一望する。
「ええ、そう見える」
「ぼくも、同じように考えている。人は言葉や集団ではくくれない。みんながそれぞれの自分をかかえて生きている。それが現実だし、それでいいとしか言いようがない」
「寂しい」
「だから、集まるんだ。そうやって、つながろうとする。それも事実だ。受け止めるしかない」
「松長さんの話って難しい」
「難しくはないさ。体で現実を受け止めろって言ってるだけ。人には五感があるし、第六感ってものまであるそうじゃないか。だったら、それを総動員して現実に立ち向かえばいい」
「でも、それで他人を傷つけたり、逆に自分が傷つくことがあるとしたら？」
「甘えちゃいけない。戦えばいい。それができないなら、戦えるだけの力を養う努力をすればいい。それまで他人に頼っちゃだめだと、ぼくは思う。戦う力をつけるために、他人の助けを借りるくらいなら構わない。でも、最後に戦うのは自分だ」
「戦う？」
「そうだよ。戦う。誰かと一緒に戦うこともできる。好きになるとか愛するというのは、その一緒に戦う相手を求めることだとも言える」
「少しだけ分かったような気がする。ほんの少しだけだけど」
「よかった」

わたしははっとした。ディスタンスには、ばらばらな状態の意味もあるのではないか。だから、松長は急に「ばらばら」なんて話を蒸し返したのではないだろうか。今いる店の名と自分が口にした言葉との符合に驚く。同時に、わたしは、さっき公園脇の歩道で松長に上体を抱かれたことを思い出した。

「最初、ぼくは君が単なる個人的な趣味から男の子の格好をしているのだと思った」と、松長はジントニックを飲み干した後に語り始めた。「そうした女性を、この辺りでもたまに見掛けるからね。そういう格好と関係があるなしは別にして、女性同士の交際を求める人たちの店も、この近くに何軒かあるらしい。ぼくは、よく知らない。ただ、君は、そういう女性に持てるタイプにも見える」

「そうですか」

「たぶんね。いずれにせよ、ぼくは中性的な人に引かれる。男っぽさを過剰に意識した男や、自分が女性であることに安住している女性には引かれない。こういうのは、男に引かれる男よりも、中性的な少年に関心のある一部の女性のほうが理解してくれるんだけど」

音楽と周りの声がうるさいため、松長はカウンター上でわたしに顔を寄せて喋っている。時にはその距離が近すぎはしないかと思うこともあるが、嫌な気はしない。むしろ周りの目を意識して、意味もなくほほ笑み返している自分がいる。二人して何か秘密のドラマを演じているような共犯めいたときめきを覚える。

松長は店の中の客の大半を知っているようで、ときどき店内を見回し、そのたびに誰かと目礼を交わしたり、手を上げたりする。中には松長を見つけてわざわざ近寄り、「松長さん、また違った子を連れて来ている」と言う若い人もいる。

そんな言葉を聞くと、わたしはほおがほてるのを感じる。平気を装っていいのか。怒った振りをすればいいのか。曖昧な立場に置かれた自分を感じる。わたしは亡くなった弟の格好をした島田香織、つまり島田光太のイミテーションである女としてここにいるのか、それとも、単に男の格好をした島田香織という女としてここにいるのだろうか。

そうした迷いがあるため、作る表情を決めかねる。松長というワルにナンパされ、だまされているお馬鹿な男の子だけには見られたくない。でも、周りはそう見ているにちがいない。

ただ、自分が自分以外の存在を演じているという思いは心地よい。できるなら、このままずっとその思いに浸っていたい。今ある自分を消してしまいたい。自分が演じている役柄に侵されたい。

甘美な夢のような時の中で、わたしは弟のことをしだいに忘れつつあった。わたしはその危うさに気付き、話題を弟へと移した。

「あの子もこの店に来ていたらしい」

わたしは再び店のネーム入りのブックマッチやグラスの話をした。

「その子を見たことはあるよ。でも、はっきり言って興味はなかった」

昼間にこの街に初めてやって来たような「掘り出し物」を松長が求めていることは、すでに聞いている。松長の話では、この街で光太を最初に見掛けたのは今年の四月だったように思うという。予備校に入るために、光太が上京して間もないころだ。短期間のうちに、光太はこの界隈や、携帯電話でつながりあっている男や男の子たちのあいだで、よく知られる存在になったらしい。

「断っておくけど、これは噂として聞いただけだ。ぼくは知らない」
「やっぱり相当遊んでいたんだ、あの子」
　ちょうどそのとき、松長は知り合いから背中をつつかれ、わたしに断って席を立った。わたしは三杯めのジントニックに口をつけた。

　一人になったわたしに対し、松長と一緒にいたときよりも露骨に視線を投げてくる者もいる。男が女を見るさいの誘うような目配せもあれば、女が女をライバル意識を持って見るときの意地の悪そうな目つきもある。酔いも手伝い、わたしはわざと媚びた表情を作ったり、相手を小馬鹿にしたような視線を返したりして、ひとり楽しんでいた。
　会話の相手を失い、自分でもドリンクを飲むペースが速くなっていると感じる。うちの家系の女は誰もがアルコールに強い。それでも、少し心配になってきた。目の前のジントニックがブラックライトの下で透き通った南の海のように青く光る。
　激しい曲のリズムが充血した脳細胞を揺さぶる。酔いが回ってくるのを感じる。悪い気分ではない。男？　女？　光太？　香織？　自分が演じている対象がふと不明になる瞬間がある。男たちの視線ゲームに加わりながら、自分の性も名前も演じている役柄も今ある状況も忘れそうになる。
　ふと気付いたときには、静かな曲に変わっていた。心細さを覚え、グラスに残っているジントニックを氷と共に一気に口に含み、後ろを向いて松長を探した。
　松長はフロントに近いカウンター席の横に立ち、地味な格子柄のブレザーにジーンズ姿の男と話していた。相手はさっき松長を呼びに来た男とは違う。松長がわたしの目に気付き手を上げた。わたしは口に含んだ氷をがりがりいわせてかみ砕き、ふくれっ面を作り、再び正面を向いた。
　格子柄のブレザーを着た男をともない、松長はすぐに戻ってきた。友達を紹介するからと言って松長はわたしの肩を抱いた。
　松長の口から漏れた突然のうそに驚く。わたしはカオルという名で、ブレザーを着た男に紹介された。男は上田と名乗った。面と向かっても目を合わせようとしない男だった。
「ねえ、カオル君って誰かに似ていない？」
　アルコールのせいで顔に赤みがさしているが松長は相変わらずの澄ました表情で上田に言った。わたしは松長が何を言い出すのか見当がつかずはらはらした。
「眉や口の形なんか、そっくりだろう？」と、松長は続けた。
　シャイなのだろうか、上田はまぶしそうな目でわたしをちらりと見てから、再び視線をそらせた。
「誰に？」と、上田が間接照明の下でも真っ赤に見える顔をして尋ねた。
「おまえが好きだった子に決まってるじゃん」
「おれ――」
「おい、逃げるなよ」と、松長はわたしたちから離れようとした上田の腕をつかんだ。「似てるだろ？　会ってすぐにそう思ったんだ」
　上田がちらりとこちらに視線を投げた。
「もっとびっくりさせてやる」と、松長はポーカーフェースを崩さずに言った。

　目の前で松長が演じている「お芝居」に急に腹が立ち、松長に翻弄されている上田がかわいそうに思えてくる。わたしは、スツールに腰掛けたまま体を回し、松長の足を目がけて思い切り蹴った。
　松長が冷静にわたしの様子を観察していたのかどうかは分からない。酔っていたために、わたしが頭の中で描いていた動作と実際の動作が一致しなかっただけなのかもしれない。松長が身をかわし、蹴りは不発に終わり、わたしは片足を上げたまま仰向けに倒れそうになった。
「おいおい、ここはスケートリンクじゃないよ」
　松長がわたしの体を抱いて支えた。
「実は、カオル君は、ヒカル君の双子の兄弟なんだ」と、松長はわたしをスツールにきちんとした姿勢で腰掛けさせながら上田に言った。
　上田が顔をしかめた。
「松長、おれはそこまでおめでたくはないぞ。話が出来すぎだ。冗談はよしてくれ」
　はっきりとした口調で上田は言った。人の良さそうな上田は、これまで松長の冗談の犠牲に何度もされてきたに違いない。そんなことが想像される。
「もちろん冗談さ。でも、似ていることは事実だ。それは認めるだろう？」と、松長は平然と言った。
　場がしらけた。わたしは再度松長の足を蹴りつけたい衝動に駆られた。一連の出来事を目の当たりにして、わたしの酔いは冷めかけていたが、酔った振りをして松長に寄り添いながら、上田に聞こえるくらいの声で冗談ぽくささやいた。
「上田さんは、ヒカルの前の彼氏だったの？」
「いや、こいつの片思い」
「ふーん。ヒカルって持てたんだ？」
「大変なもんだったよな」と、松長が上田を横目で見ながら言った。
「おれ、上田さんのこと好きかも」と、わたしは思いもしない言葉を口にしていた。
　上田はハンカチで額の汗を拭いながらフロントへと向かい、店から出て行った。

　音楽と客たちの声でうるさいにもかかわらず、わたしたちの会話は、周りの者たちの耳に入っていたらしい。
「君って、本当にヒカルの双子の兄弟？」
　三人連れの少年たちが寄って来て、そのうちの一人が聞いてきた。
　とっさの判断ができかねて、わたしは松長の顔を見た。とぼけた表情でそっぽを向いている。いかにも松長らしい。
「そうだよ。おれのほうが兄」と、わたしは居直って答える。
「うそー。そんな話ぜんぜん聞いていない」
「『聞いていなかった』だろ。もう過去の話じゃん」
「ホクロはないんだね」
　少年がわたしの目元に視線を当てる。
「右目の下のホクロだろ。同じ形のが背中にあるらしい。見たことはないけど」
　にやりと笑いながら、嘘がすらすら出てくる自分に驚く。わたしは光太の兄という新

しい役柄に自分がなりきっているのを感じる。
「髪型と着ているものが似ているから、君が松長さんと入って来たときから、噂し合ってたんだ。ほおの感じと、髪の感じがちょっと違う。ジェル持ってる？」
「いいや」
「おれ、持ってる」と、もう一人の少年が言って、さっきまでいたらしいテーブルに向かい、角ばった革のカバンを手にして戻って来た。中からジェルのチューブとブラシを取り出す。
「そのままにしてろよ」
　わたしがカウンターを背にしておとなしくスツールに腰掛けていると、その少年はジェルをわたしの前髪の付け根に押さえるようにこすり付けた。
「これでも、ちょっと違うな。もっと全体的に髪を上げていたんだよ」
「おいで」
　言われるままに付いていくと、ジェルとブラシを持った少年はトイレのドアを開けた。当たり前のように、ドアを手で押さえている姿を見て、わたしはためらわずに中に入った。
　ドアが閉まり、手洗いの鏡の前に立たされる。少年は指を水道の水で濡らし、ジェルを手のひらにたっぷり付けて両手をすり合わせた。
「よし」と声を出し、「頭を動かすなよ」と断り、両手の指を開いて、器用な手つきでわたしの髪を撫で上げていく。
「髪が細いね。触っていると女の子みたい」
「女みたいで悪かったな」
「だから、じっとしてろってんの」
　わたしは光太が硬い髪質だったのを思い出した。美容室でカットされた髪を、ジェルやブラシを使って自分なりにアレンジしていたのだろう。この男の子は、それを再現しようとしている。
　カウンター席に戻ると、残っていた二人が拍手した。松長までつられて手を叩いている。
「そう、こんな感じ」
「写真、撮ってよ」と言って、わたしはポケットから光太のケータイを取り出した。
　最初に話し掛けて来た少年が、正面から二枚と左右から一枚ずつ撮ってくれた。
「これ、ヒカルのケータイじゃない？」
「うん。形見だよ。警察から返してもらったやつ。そういうこととか引越しとかあって、おれ、名古屋から来たんだ」
「形見か？　　よく戻ってきたな」と言いながら、少年は左手を差し出しケータイをわたしに手渡した。
　その少年の手首に、光太の持っていたのと同じ型のタグホイヤーがあった。光太は、物に対する執着心に欠けるところがあった。高価なものでも、飽きると平気で友達にあげてしまう。光太がその少年に腕時計をくれてやるさまが、頭に浮かぶ。『これ、あげるよ』という声まで聞こえる。
　これこそが光太の形見だ。ケータイなんか形見じゃない。ケータイがあの子を奪った

のだから。

「おれ、あの日、ヒカルに薄手の革ジャンを貸してやったの。イタリア製のすげえ高いやつ。暑いからって言って、あいつ、タンクトップの上に着て出掛けていった。それっきり。あの革ジャンは、もう戻って来ない。上半身が、ずたずただったって話じゃない」

　わたしは突然、めまいと吐き気を感じた。渡されたケータイを思い切り床に叩きつけ、少年の手首にあるタグホイヤーを奪い取ろうと、手を伸ばした。きーんと耳鳴りがして体が傾いていく。重心を失った。誰かが、わたしを抱きすくめた。

　気が付いたときには、松長の胸元に顔を埋めて泣きじゃくっていた。

第 12 話　離れる

＊

「伸びている分だけ切ってください。男性みたいな髪型でお願いします」
　注文をつけると、担当の男性美容師は黙ってうなずいた。いつもの愛想の良さがない。やれセットだパーマだカットだカラーリングだと、割とこまめにこの美容院に来ていたのが、ぴたりと来なくなっていたので機嫌が悪いのかもしれない。カオルは思う。
　へそを曲げられて変な髪にされたくないので、ずっと旅行中だったと言い、長く来なかったことへの詫びを入れておく。弟の死について、この美容師は知らない。知る必要もない。
「途中で寄った東京で、友達にそそのかされて、衝動的に髪をばっさりと短くしちゃった」
　このところ、平気でうそが口から出る。それが癖になってしまったようだ。カオルには、それが快い。
「そうなんですか？　　あの長かった髪は、わたしがこのハサミでバサっと切りたかったな。さっき入っていらっしゃったのを見て、別の人かと思いましたよ。で、切ったときには心境の変化でも？」
　美容師は普段の口調で聞いてくる。
「女が髪をばっさりと切るのは、たとえばどんな場合ですか？」
「まず考えられるのは、失恋。第二の可能性は、男が変わったとき」
「へーえ、なるほど。そんなものですか」
「ほかにありますか？」
「女が変わったとき」
「わあー、参ったな、香織さん。しばらく振りでお会いしたと思ったら、髪型が変わっただけじゃなくて、性格までずいぶん気さくになっていらっしゃる」
「それまでは暗かったとか？」
「いえいえ、おしとやかなお嬢さんだったという意味です」
「でも、今はそうじゃない。それって、けなしてるんじゃないですかあ？」
「参ったな。香織さん、もういじめないでください」
「さっきの女が変わったというのは冗談ですよ。念のためです」
「もちろん分かってますよ」
　美容師の笑顔の中で探るような目付きが、こちらの心を覗き込もうとしているとカオルは考える。このところ、まわりからこうした視線をよく感じる。
　何がおかしいのか、カオルには分からないままに、美容師との会話は笑いに満ちたものになった。どこかちぐはぐだ。でも、かまわない。カオルは思う。美容師にドアまで送られて店を出る。

「彼氏……じゃなかった、彼女によろしく」と、美容師が職業上の笑顔を崩さず言う。
（くだらない。名古屋に帰ってからも、こんなことやっている。）

外に出ると首筋が寒い。マフラーを持ってくればよかった。店に入った時間には、外は既に暗くなりかけていて、商店街にはネオンや明かりがぽつぽつともりかけていた。その時は夕方のうきうきした気配に自分も染まっていたが、今は寒さのせいか心細く泣きたい気分が襲ってくる。街の光の氾濫がうとましい。
他人と接していた緊張が解けた頭に、思い出したように周りからぎゅっと押し付けられるような鈍い感覚が戻る。同時に下腹が痛み始める。今回の生理は重くて長い。
（この一カ月間に、いろんな馬鹿なことをしていた罰だ。）

立ち止まって、弟のカバンを開け、痛み止めの常備薬が入っているのを確かめる。どこかで薬を飲もうと思い、コンビニかドリンクの自動販売機を探す。照明を落とした店のウィンドウに、街にあふれる人工の明かりを受けた自分の姿が映っている。
男物の茶系のジャケット、薄い茶の地に細かい白のラインが入ったシャツ、ゆったり目のグリーンのパンツ、黒っぽい靴。角ばったカバン。サイドとバックを刈り上げた髪型。
（やめろ、もうそんな髪型はロンドンでは流行っていない。着る物も、靴も、カバンも全然合っていない。馬鹿な真似はよせ。）
そうかな？　これでいいと思うけど。
（みっともない。お願いだから、やめてよ。）
ウィンドウに映っているのは、二十歳くらいの男だ。私服の男子高校生にも見える。
（ったっく。救いようがない。）
そんな言い方やめてよ、ヒカル。
（気安く、ヒカルなんて呼ばないでよ。ぼくは名古屋では、光太って名前なんだから。お姉ちゃんも、カオルじゃなくて、ここでは香織、か・お・り――。分かった？　あの店で、あの松長というワルが付けたあだ名なんか忘れろ。あれは、あの場だけの冗談なんだ。カオルだって？　マジでやばいぞ。）
男らしく振る舞わなければならないとカオルは思い、顎を上げて胸をそらし気味に歩いてみる。東京で見たあの高校生らしき少年の歩き方は、名古屋にはふさわしくない。この田舎の都市は気に食わない。東京に戻りたい。
（戻れ、戻れ、そして痛い目に遭えばいいんだ。誰かさんみたいに。）

商店街を家に向かって歩き出す。
正面から来る男たちは、もはや道を譲ってはくれない。男は女に道を譲る。男は男に道を譲らない。たとえ譲ってたように見えても、譲ったのではなく、ちょっと方向を変えただけか、こんなやつと肩を触れ合いたくないからよけただけ、と自分に言い聞かせる。それが男だと、カオルは考える。
まわりの男たちをそれとなく観察する。ウィンドウに映っていた自分と同じくらいの年に見える少年に目をやる。たまたま目が合うと首をかしげる少年もいれば、恐ろしい目をしてにらんでくる少年もいる。

（本当に痛い目に遭うぞ。）

いざとなったら、女に戻ればいいんじゃん。きゃー、この人痴漢でーす、とか叫べばいい。

（卑怯者。中途半端なやつ。）

何とでも呼んでよ。というか、ほかに逃げ道がある？

（だから、もとに戻りなよ。）

女たちがこっちを見る目も違うとカオルは感じる。以前なら女同士で視線を交わすときには、自分の目にも相手の目にもライバル意識と敵意がこもっていた。

髪をうんと短くし、意識して男の子の格好をしている今は、偶然に目が合う女や女の子たちは一種の媚を帯びた視線を投げてくる。こっちもそれに応えてやる。視線のゲーム——。たまに性的で不躾な目線を作り送ってみると、相手は恥ずかしげな顔付きになったり、怒ったような表情をするが、敵意は感じられない。

カオルは一カ月前を思い出す。

男が女を見る目で男が男を見、女が女を見る目で男が男を見、女が男を見る目で男が男を見ていたあの街。男を装った自分は、男と男の複雑な視線のゲームに加わり、そのめまいを伴う混迷に酔いしれた。

曖昧、不明、分からない。そんな言葉でさえ説明できない状況は、決して不快なものではなかった。突き刺す視線に満ちた街。容赦なく向けられる視線が痛い。こちらからも視線を射る。見返される。痛い。鳥肌が立つほどの皮膚的な心地よさと、皮膚の下の肉や血や骨にまで染みこんでくるような快い痛みがあった。その快と苦が全身を駆けめぐった。

男と男。それだけはない。

あの少数者の街では、さらに少数者がいた。中性的な若い男女が好きだという男に送られて、あの街を去ろうとした夜——。通りで、女を求める女の視線を感じた。あの人たちの鋭いまなざしは拙い男装をすぐさま見抜いた。男が女を見る目と、女が女を見る目の両方を兼ね備えた執拗で粘っこい眼力で心の奥まで踏み入り、仲間かどうかを探ってきた。ごく短い間の出来事だった。もう少し、長く見つめられたなら、あるいはあの男が傍らにいなかったなら、自分はあの目に引き込まれたかもしれない。

（くだらないことを考えるのはやめろよ。そんなの言葉の遊びじゃん。どんなに言葉を重ねても、実際には何も言っていないに等しい。ぼくみたいに行動してみる気がないから、そんなご託を並べられるんじゃん。ぼくみたいに命をかける度胸がないくせに——。）

どうしたんだろう。また道に迷ってしまった。どうして、最近、こういうことが起きるんだろう。カオルは戸惑う。でも、きれい。いろんな人工の明かりにともされた街がきれいに見える。世界が新しく見える。

（そんなの錯覚だ。）

自分も他人も互いに見ることで世界は成立している。見ることと見られることの隔たりをできる限り近づけること。それが新しい他者との交わり方だ。隔たり、距離、ディスタンス。

（それって、お姉ちゃんが昨日の夜に読んでいた本の受け売りじゃん。長い間パリにいたとかいう、元帰国子女のあの男の薦めた本なんか読んじゃだめ。ぼく、あいつのこと大嫌い。）

　松長さんの悪口はやめてくれない？　　恩人なんだから。

（ふーん、恩人ねえ。）

　人は目という鏡で他者を相手に互いを照らし合うことにより世界を認識している。この場合の他者は人間であるとは限らない。森羅万象と言い換えることもできる。

　人に限って言えば、世界は鏡を持った個人の集まりだ。一人ひとりの人間が鏡を差し出しながら歩いている。鏡の表面を世界に向け、他者に向け、自分自身に向けながら、歩いている。きらきら反射する無数の鏡の中で無数のまなざしが戯れ合う。

（起きろよ。言葉の遊びから目を覚ませ。）

　道が分からない。めまいがする。キーンという耳鳴りが聞こえる。頭の中でぐるぐる回る光に満ちた光景が、目の前に輝く夜の繁華街の雑踏と重なる。

＊

「――やっぱり疲れているんじゃない？　　無理しないほうがいいよ、香織」

　夜の街を歩き疲れたカオルは、自室のベッドに身を横たえ、携帯電話で岸川詩乃と話している。

「かおり？　　カオルよ」

（やめろ。お姉ちゃんは、か・お・り。ヒカルはもういない。カオルも、もういない。カオルは、ヒカルの代わりにあの街とヒカルの仲間たちにお別れに来た幽霊だったんだ。ぼくに化けた幽霊だったんだよ。もうカオルの役目は終わった。）

「えっ？　　何か言った？」

「ううん。気のせいじゃない？」

「とにかく無理をしちゃだめ。家でぼけーっとしていてもいいけど、あんまり深く考えたり、難しい本を読んだり、疲れるまで外を歩き回るような真似はしないほうがいいと思う」

――どうして、詩乃はそんなことを知っているのだろう。知っているっていうことは、こっちが話したんだろう。

「そうかな」

「わたしはそう思う」

（ぼくも、そう思う。）

　携帯電話のスピーカーを通して聞こえる詩乃の声は、東京と名古屋との距離を感じさせない。詩乃がまだ精神的な状態を気遣っていてくれることはうれしい。だが、同時にカオルにとってはうっとうしくもある。

　一カ月前に、詩乃をレストランでの食事に誘ったとき、詩乃が探るような目で自分を見ていたことを思い出す。カオルは亡くなった弟のアパートの部屋の引っ越しを済ませたことを報告し、上京中に世話になった礼と詫びの言葉を述べた。

　あの街で弟がよく行っていた店に入ったと語ると、長かった髪をばっさりと切って男装をし始めたとき以上に、詩乃は驚いた。
「一人で？」
「ううん。知り合いと」
「知り合いって？」
「あの街で知り合った男の人」
（あの遊び人のワル。）
「うるさいわね――」
　あれっ、変なの――。最近、カオルには過去の記憶と現在の出来事が重なって感じられる。
「えっ？　　何か言った？」
「ううん、何も言ってないよ」
『香織、あなたは自分がどんなに危険で突拍子もないことをしているのか、分かっているの？』
　レストランで、カオルはかいつまんで松長との出会いについて話した。それを聞いて、詩乃はカオルの目をまともに見た後、しばらく黙り込んだ。その深刻そうな表情を見て、カオルはそれ以上打ち明ける気にはならなかった。
　電話をしながら、カオルはデジャ・ビュを覚える。今聞こえた詩乃の声は今のことなのか、東京にいたときに話したことなのか。
「もしもし、聞いている？」
「うん、聞いているよ」
「で、そっちでは、ちゃんとお医者さんに診てもらっている？」
　スピーカーから詩乃の声がする。
「心療内科には、お母さんと一緒に通っている」
（時間が解決するさ。お母さんとお姉ちゃんは、これからずっと、ぼくが守ってやる。）
「そう。それならいいけど。おばさんも、落ち着いたみたい？」
「元気にしてるよ。うちの一族の女はみんな、しぶといもん」
（しぶとくないって。）
「しぶとい？」
「それはそうと、こっちはもう学園祭も終わって、授業に出なきゃならないし、特に語学の出席日数が危ないんだ」
　詩乃と話しているうちに猛烈な空腹を感じ始め、カオルは携帯電話を手にしながら階段を下り、キッチンに入る。
「留年なんてしないでよ」
「大丈夫。何とかなるさ」
（何とかならないから、岸川さんも心配してるんじゃん。勉強ぐらいしなよ。）
「じゃあ、わたしそろそろ」
「分かった。また話そうね」
　カオルが下りてくるのを待ち構えていたように、母親が話し掛けてくる。
「その髪のことなんだけど」

キッチンと続きになっているダイニング兼居間のソファに座った母親は、お気に入りの白のペルシャ猫を抱いている。

美容院の帰りに道に迷ったカオルは、遅く帰宅した。迷っているうちに見つけた牛丼屋に入り、一人で大盛りを食べて来てはいたが、今になってまた何かを食べたくなり我慢できない。

三十分ほど前にカオルが帰って来たとき、母親は帰宅時間が遅いことを叱るより、髪型についてさんざんけなした。今、口を利けば大喧嘩になりそうな気がする。カオルは母親を無視して冷蔵庫を開ける。

「あなたは、長いほうが似合うと思うんだけどなあ。どうしてまた、前と同じように短くしたの」

母親はペルシャ猫を抱いたまま、キッチンに入ってくる。その足元に、黒のペルシャ猫とグレーの雑種の猫が付きまとっている。

「ねっ、香織は長い髪が似合うよね」と、母親が腕の中の猫に言う。

（そうだ、そうだ。）

お母さんだって、何よ、その格好――。そう言い掛けてやめる。

（ねっ、変だろう？　お姉ちゃんだって、同じだよ。自分を取り戻せ。取り戻すんだ。ぼくが手伝ってあげるから。）

名古屋に帰ってすぐ、母親が弟のシャツを着ているのに気付きカオルはどきりとした。一瞬、光太の幽霊を見ているような気がした。シャツは弟の部屋でカオルがきちんと畳んで荷造りをし、引っ越しのさいに送ったものだ。パステルカラーの赤と白の細かいストライプのもので、見覚えがあった。そのシャツを着ている母親を見ているうちに、むかむかしてきたのを覚えている。

それ、光太のものでしょう、と平静を装って尋ねると、あの子、ずいぶんいいものばかり着ていたのね、と母親はうれしそうな顔をして答えた。そのさらりとした物言いがあまりにも自然なので、カオルはそれ以上何も言わなかった。

今母親が身に着けているのは、弟のＶネックのサマーセーターだ。素材が綿だし青と白の配色がいかにも涼しげで、十一月半ばには時季外れな印象を与える。若い男性向きのデザインも、背の低いずんぐりした体形の母親には全然似合わないとカオルは思う。

「男の人みたいで怖いよね」

猫にほお擦りしながら母親は言う。

カオルは、電子レンジの中でグラタンを乗せて回るターンテーブルをガラス越しに眺める。めまいがしてくる。

「グラタンはお母さんが食べて」

急に食欲をなくしたカオルは、二階に上がり自室に入る。眠気に襲われる。窓の下の道路に車が通ったのだろう、カーテンにオレンジ色の光の縞が走る。

眠い。疲れた。そして、恋しい。

夢を見た。

二人はバスか電車に乗っている。夜なのだろう。車窓の外は真っ暗で何も見えない。二人は体をくっつけ合って座席に着いている。乗客はほかにはいない。車体が揺れる。揺れ

ながら、いっこうに進んでいる気配がしないのが不思議だ。窓に目を凝らすと、遠くに点々と連なる小さな明かりがゆっくり後ろに流れていくのが見える。それが書き割りめいていてどこか嘘っぽい。気が付くと、車内に男たちがあふれている。誰もがまがいものぽい。マネキンのようにも見える。その人形めいた男たちの姿がいきなり消えた。二人は顔と顔をくっつけ目と目を寄せ合った。瞳が揺れる。
（お姉ちゃん、ぼくの代わりにいろいろしてくれてありがとう。もう、ぼくには化けなくでもいいからね。さようなら。）

＊

朝、ようやく体調が回復した。気分がいい。頭もはっきりしている。
午後から大学の授業に出よう。久しぶりにお化粧をして。化粧――、そうだ、女に化けてやるんだ。服もえらばなきゃ。

鏡に向かう。見れば見るほど自分の顔が分からなくなる例の感覚がよみがえる。
なんだろう。右目の下に米粒半分くらいの茶色っぽい染みを見つけた。
ホクロの卵なのか。目の前の顔が誰のものなのか不明になる懐かしい曖昧さを楽しみながら、ゆっくりとわたしは鏡に近づく。
（ぼくは、今遠いところにいるらしい。お姉ちゃんの姿は、もう見えない。でも、絶対に守ってやる、ずっと。）

【小説】ディスタンス

著　　星野廉

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社